

The region agriculture leader of Wakayama Prefecture

和歌山県
農業士会連絡協議会

和歌山の 農業士

2013
11
November

地域農業をリードする熱き農業者達

第1号



はじめに

本誌『和歌山の農業士』は、和歌山県の地域農業を牽引するリーダーとして知事から認定を受けた『農業士』が互いの活動を共有し、外部へ積極的に情報発信していくため、作成しています。

農業士が長年の農業経験で培ったその経営観や考え方、これからの農業にかける熱い想いを紹介する内容に加え、地域で展開される普及活動や農業士会としての取り組みなどを内容に盛り込んでいます。

農業に関係する皆様方には、是非、ご一読頂き、地域農業の実情や農業経営の現状等について、ご理解を深めて頂ければ幸いです。

C【目次】 CONTENTS

卷頭言

『今の時代に想うこと』 (和歌山県農業土会連絡協議会 会長 吉本好澄) ······	1
『5年後、10年後の地域の姿を考えてみませんか』	
(和歌山県農林水産部経営支援課 課長 木下繁慶) ······	2

私の農業

農業士達がこれまで培った自身の経営や活動を紹介

『仕組み』が分かれれば、経営は伸びる～軟弱野菜周年安定供給の実現 (和歌山市 指導農業士 西村芳規) ······	3
みんなの力で、全てが上手くいく (紀の川市 指導農業士 辻本敏之) ······	5
原点に帰った農業を目指して ～柿と野菜・水稻の複合経営～ (九度山町 地域農業士 藤井栄一) ······	7
適地適作を実践!! ～こだわりの温州みかん栽培～ (有田川町 指導農業士 三輪敏郎) ······	9
消費者の気持ちを大切にして経営を考える ～時代に応じた果樹・野菜の複合経営～ (日高川町 指導農業士 長岡 均) ······	11
小さな産地は、立地条件を生かし、技術を高めて自分の製品スタイルを確立 ～消費者にお茶の本当を伝える～ (白浜町 指導農業士 上村 誠) ······	13
農業への転職 ～必要に迫られ現在に至る～ (那智勝浦町 指導農業士 中村誠一) ······	15

農業に懸ける想い

青年農業士や新規就農者が農業への熱い思いや取り組みを紹介

人とつながる農業経営を ～地域と農業の活性化を目指して～ (紀美野町 宇城哲志) ······	17
農業を楽しみ続けたい ～複合経営・契約栽培への挑戦～ (紀の川市 青年農業士 岡野尚平) ······	18
～就農して11年～ (かつらぎ町 青年農業士 新岡 愛) ······	19
収益性の向上をはかる ～高品質果実生産の実現～ (湯浅町 青年農業士 井上芳信) ······	20
「日に新た」 (御坊市 青年農業士 西本史人) ······	21
努力は必ず報われる! ～テーマは絆～ (田辺市 青年農業士 高田直幸) ······	22

県農業大学校学生です

～2年生の自己紹介 & 近況報告～ ······ 23

明渡 邦弘 石倉健太郎 岡 智也 小川 竜矢 川嶋祥太郎
高橋 杜弥 田代 悠 龍見 拓真 津田悠太郎 中山 将誓
根来 亮 本田 裕貴 松本 怜真 三木 稔倫 南方 一樹

地域の逸品

農業士が自慢の地域の隠れた逸品を紹介!!

農家がつくるジェラート!! Kiminoka (キミノ一力)

(紀美野町 地域農業士 古田好美) 26

安心・安全に育てたジャバラは丸ごと美味しい～ジャバラピール&ジャバラ果汁

(かつらぎ町 青年農業士 新岡 愛) 26

はないいちご農園の『イチゴのクラッシュアイス』

(美浜町 地域農業士 久保博巳) 27

和紅茶いろかわ!! 両谷園

(那智勝浦町 青年農業士 松本安弘) 28

試験研究レポート

梅調味廃液添加鶏ふん施肥の施用がハクサイの収量に及ぼす影響

～収量・品質は化成単用とほぼ同等、塩分の影響はなし～

(和歌山県農業試験場 環境部 副主査研究員 橋本真穂) 29

黄色のモモ新品種『つきあかり』

(和歌山県果樹試験場かき・もも研究所 主査研究員 堀田宗幹) 31

果皮被覆資材によるウメの果皮障害『黒点症』の軽減効果

(和歌山県果樹試験場うめ研究所 副主査研究員 城村徳明) 32

普及活動レポート

夏期栽培に適したホウレンソウ・コマツナ有望品種の検討

(海草振興局農業振興課) 33

『まりひめ』導入によるいちご産地の活性化

(那賀振興局農業振興課) 35

飛躍する柿産地の振興～あんぽ柿加工の取り組みについて～

(伊都振興局農業振興課) 37

温州みかんの浮皮軽減技術の現地実証試験について

(有田振興局農業振興課) 39

梅の安定生産と優良品種導入による産地の活性化

(日高振興局農業振興課) 41

梅を核とした産地育成と果樹複合経営の確立

(西牟婁振興局農業振興課) 43

『サツマイモ(なんたん蜜姫)栽培』への取り組みについて

(東牟婁振興局農業振興課) 45

県農業士会活動レポート

平成25年度県農業士会連絡協議会県外視察報告

～JAみつかび(静岡県)、有限会社ゴトーアグリ(愛知県)を視察～

(和歌山県農業士会連絡協議会事務局) 47

卷頭言

「今の時代に想うこと」

和歌山県農業士会連絡協議会

会長 吉本 好澄



平成25年4月23日に開催されました県農業士会連絡協議会の通常総代会におきまして、会長に就任させていただきました和歌山市の吉本です。

会員の皆様方には、農業士会活動のみならず、各地域において、リーダーとして御活躍されている事に厚く御礼申し上げます。

さて、本年度になって、急に日本のTPP（環太平洋戦略的経済連携協定）への参加が浮上してきました。決定ではないにしても、世界の潮流から見て、今更、脱退することはできず、かなりの部分を自由化せざるを得ないのではと感じています。

結果として、単に関税が下がるというだけでなく、日本独自の制度等が否定されるかもしれません。閉塞感のある日本経済と同様、農業という産業においても、マイナス面だけ取り上げず、これを機会に別の方向から見つめ直すチャンスと捉えてはいかがでしょうか？

和歌山県の農業に関するいろいろな課題を抱えています。担い手不足や耕作放棄地の拡大、鳥獣害の増加、数えれば切りがありません。

このような時代に生きる我々農業士には、農業後継者の育成・地域農業の振興など重要な活動に期待がかかりますし、お互いにまた外部とも連携した活動が必要です。

農業士会での研修や交流活動を通じてネットワークをつくるとともに、今回から装い新たに発刊となった本誌『和歌山の農業士』での会員の熱意溢れる農業への取り組み紹介が、農業士が互いにつながることは勿論、様々な方々とつながる一助になればと考えています。農業士としての誇りと情熱を持って、和歌山県の農業を育ていきましょう。

県農業士会連絡協議会としても、関係機関・団体とも協力して、諸問題に対応していきたいと考えています。今後4名の副会長を始め、総勢15名の新執行部で力をあわせて頑張っていきたいと思いますので、皆様の御支援・御協力をお願い申し上げます。

最後になりましたが、西村前会長を始め、役員を退任されました皆様方には、深く感謝を申し上げますとともに、会員の皆様方の御健康をお祈り申し上げ、会長就任の挨拶と致します。

卷頭言

「5年後、10年後の地域の姿を考えてみませんか」

和歌山県農林水産部 農業生産局

経営支援課長 木下繁慶



農業士の皆様におかれましては、日々地域農業のリーダーとしてご活躍され、協同農業普及事業へのご協力はもとより本県農業の振興に格別のお力添えを頂いておりまこと心より厚く御礼申し上げます。

さて、本冊子はこれまで「あぜみち」という名前で親しまれてまいりましたが、今回から「和歌山の農業士」にリニューアルされました。本冊子には、『私の農業』『農業に懸ける想い』など各地域の農業士の方々の農業への思いや創意工夫の取り組みなどが満載されており、明日の農業の展望が開ける思いがいたします。今後、農業士会会員の身近な情報誌として多くの皆様に親しまれるように願っているところであります。

昨今の農業情勢は、本県においても主業農家が年々減少する中で、65歳以上の基幹的農業従事者の割合は54%を超えており、構造改革の大きな節目となっているところであります。

国においては、平成25年5月に「成長戦略」の「攻めの農林水産業」として「人・農地プランの戦略的展開」や「担い手への農地集積」「農業基盤整備の推進」などの施策を打ち出しています。

本県は、ご承知のとおり、主に中山間地の傾斜地などを利用した果樹や野菜・花き栽培などの集約的農業が特徴で、農地の流動化の取り組みにおいても、産地の振興と担い手の育成の視点が重要です。このため、普及活動においては、各地域毎に重点課題を設定し、地域振興品目の育成や農家経営の改善、担い手の育成などに積極的に取り組んでいるところであります。

また、各地域では、JAや市町村が農地利用集積円滑化団体を設立し、農地の代理貸付け業務をスタートさせるとともに、人と農地の問題を解決する「人・農地プラン」づくりが進められているところであります。

しかしながら、その基本となるのは、地域や集落ぐるみで話し合って描く地域農業のあり方や農地の利用計画などの地域振興のビジョンであります。

農業士の皆様方には、是非、地域をリードして頂き、「5年後、10年後の地域の姿はどのように変わらのか」、「どのような農業の姿が望ましいのか」など、地域ぐるみの話し合いに一步踏み出していただけるように願っております。

勿論、JA、市町村、県など関係機関が一丸となって、地域振興のために、地域の皆様方とともに、ビジョンづくり、担い手の育成、農地の流動化を強力にバックアップして参ります。

最後に、農業士会の益々のご発展と皆様方のご健勝をお祈り申し上げます。

私の農業

『仕組み』が分かれば経営は伸びる ～軟弱野菜の周年安定供給の実現～

和歌山市 指導農業士

西 村 芳 規



1. はじめに

和歌山市紀の川以北の水田地帯に就農後、軟弱野菜の雨よけ栽培を始めた。ビニールハウスによる施設栽培により、病害の発生抑制や生理障害の軽減を図り、ホウレンソウを中心とした高品質、安定生産を目指とした軟弱野菜の経営の始まりである。

次に、ビニールハウスの稼働率を高めるため、コマツナ、シunjギクなども作付け、軟弱野菜のローテーション栽培に取り組み、ホウレンソウの作期拡大に努めた。収益性の高いホウレンソウの夏どり作型を開発するため、適した品種を試作し、さらに高品質・安定生産を目指し、自作の優良堆肥の施用による土作りやかん水方法等の栽培技術の改良等に取り組んだ。

ホウレンソウの栽培技術に一定の目途がついた後は、規模拡大によるコスト低減と量販店への直接販売及びシェア拡大と販売面へのテコ入れを行った。量販店対応として、周年出荷体制を整え、鮮度保持のため、自宅倉庫に低温貯蔵庫を設置した。これで、商品の小売での日持ちが良くなり、取引先から好評を得て販路の安定につながった。

長男の就農を機に、更なる規模の拡大を図った。延べ経営面積が5haを越え、新たな出荷・調製機器の導入と作業場へのエアコン設置により作業環境の充実を図った。

さらに家族経営協定を締結、農業に参画する家族個々の立場や権利を取り決め、認定農業者となり、目標を明確にして経営内容改善に取り組んできた。

2. 農業経営の方針と現況

長男の就農から10年以上が経過し、技術と労働力が充実。今が新たな投資を行う時期と判断、農地を取得し、栽培施設を建設。経営面積をのべ8haまでに拡大した。

【農業経営の概況】

○作付品目と面積

水稻	150a
露地野菜	300a
施設野菜	500a

○労働力

家族労力	4人
常時雇用	3人
パート雇用	10人/日程度



整備した栽培施設

(生産面での取り組み)

高品質なホウレンソウを周年安定出荷するために様々な栽培技術を試し、取り入れてきた。

最近では、施設の大型化に伴い、内部での温度ムラによる生育の不揃いが問題となつたため、循環扇と遮光カーテン装備を組み合わせることにより克服した。また、ホウレンソウの連作障害回避のために、徹底した土作りはもとより、栽培規模を拡大したメリットを活かし、コマツナ、ミズナ、シュンギクを計画的にローテーションして栽培している。

規模拡大と併せ、ほ場管理を担当する常勤従業員2名を雇用してきたが、管理作業を充実するため、平成25年度からさらに新たな従業員1名を雇い入れた。



施設での栽培の様子

(販売・雇用面での取り組み)

主な販売先は量販店への直接販売で、日持ち性を重視した高品質な生産・流通と計画的な出荷を念頭に日々の作業を進めている。

出荷調製作業が短時間で済むように、パート従業員を総勢13人程度雇用。うち10人程度が毎日作業に従事できるよう従業員間の調整を行っている。

パート従業員は熟練度等により、権限と報酬を与え、新人の指導や作業現場の運営を任せている。



出荷状態のコマツナ（オリジナルの包装）

3. 今後の経営方針

軟弱野菜の栽培技術面での課題はほぼ対応できており、これからも更なる規模拡大を目指して経営的な課題に 対処していく。具体的には、農産物の流通体系や価格形成の情報を詳細に分析し、それに対応した作付け、営農活動を行えば売上の拡大は可能である。私自身が長年の経験で培った問題解決の3つ仕組み『農作物の品質と売り場の顧客層のベストマッチ』『投資価値以上のものを産み出す設備投資』『綿密な経費計算による最適販売価格の設定』を軸に考えれば、経営はまだまだ伸ばしていくと思っている。

後継者は就農から10数年が経過し、既に、農作業の計画・運営は後継者が主体となって行っているが、今後は、経営全体の運営手法やノウハウを円滑に移譲していきたい。

4. おわりに

農業士は、地域のリーダーとして活躍することは勿論、経営感覚を磨く努力を常に心がけて欲しい。これからの農業の発展には栽培技術の改善だけでなく、経営能力の向上がより重要であり、必要となる。また、それとともに後継者育成にも積極的に取り組んでもらい、我々と同じ志を持つ仲間をどんどん増やしていきましょう。

私の農業

みんなの力で、全てが上手くいく ～タマネギと柿・イチジクの大規模経営～

紀の川市 指導農業士

辻 本 敏 之



1. はじめに

私は、和歌山県農業大学校を卒業後、旧有田川農業協同組合に勤めていたが、親の病気により帰郷。そして再び、結婚するまでと思い、旧那賀町農業協同組合に約20年間勤めたが、その後、退職し就農した。

当初は、カンキツを中心とした農業であったが、経営が安定しにくく、そのため、タマネギや柿、イチジクを導入し、規模拡大を図ってきた。

2. 農業経営の方針と現況

特別な品目ではなく、一般的に栽培されているありふれた農産物であるが、規模拡大により経営の安定化を図っている。

農業経営に対する基本的な考え方として、家族労力だけでは、農業所得を得るには限界があると考えている。より農業所得の向上を図るには、規模拡大が必要であると考え、そうした方向へ経営を持って行くよう決断した。

①生産面での取り組み

(特別栽培の導入)

特別栽培を実施し、肥料には発酵鶏糞や米ぬかを使用することで低コスト化に努め、施肥は施肥機を利用することで、農作業の省力化を図っている。

(法人設立と労働者の確保)

友人の薦めにより有限会社ロハスを設立した。ロハスとは、環境に優しい農業の実践により人の健康に役立つ農作物を作り、持続性の高い農業を営むこと目標にする農業生産法人である。

雇用労働者確保のため、初めは近隣の人などを雇用していたが、人数に限界があり、ハローワークを活用。安定的に雇用者の確保を図ることができた。

雇用者には気持ちよく働いてもらうために、常に感謝の気持ちを忘れず、挨拶をして積極的にコミュニケーションをとるなどしている。

【農業経営の概況】

○作付品目と面積

水稻	200a
タマネギ	300a
柿（平核無）	120a
イチジク	45a

○労働力

家族3人、臨時雇用10人

②販売面での取り組み

グループの取り組みではあるが、農産物の品質を保証し、働く人の環境を向上させるため、品質保証システム適正農業規範『GAP』にも取り組んでいる。

3. 今後の経営方針

現在、イチジクの栽培面積を拡大しており、近い将来、経営の主力品目にしたいと考えている。その理由は、①夏～秋にかけて収穫が続き、他の品目との労力配分を考慮し、周年雇用を図る品目として最適、②栽培管理が軽作業であること、③価格が安定していることである。1品目での売上げ1,000万以上を目標にしており、イチジクも1ha程度まで規模拡大したい。

我が家にも、新しい後継者が出来てから、はや3年が経つ。少しずつ農作業にも慣れ頑張っており、今後は、経営を譲り、新しい発想での経営を展開してくれることを楽しみにしている。



イチジクの葉巻き上げ作業

4. おわりに

私が住む地域も、高齢化による過疎化が心配されている。

そんな中、7年前から花いっぱい運動を行い、2年前に『名手上をよくする会』を結成。グランドゴルフや『楽しむ家庭菜園(イチジク、キュウリ)』などを実施し、収穫したものを地区民全戸に配布したり、販売したりしている。

こうした活動が、地域のまとまりや所得向上につながるよう願いたい。

最後に、家族や雇用者に恵まれて、農業が上手く展開できていることに感謝をしつつ、明日からの農業にまた、力を注いで行きたい。

私の農業

原点に帰った農業を目指して ～柿と野菜の複合経営～

九度山町 地域農業士

藤井 栄一



1. はじめに

私は、高校卒業後、3年間会社勤めをしていました。そんな時、派米研修生事業を知り、参加することを決め、1年間の準備をし、2年間のアメリカ研修を経て24歳で就農しました。

当初は、富有柿・普通平核無柿・みかんと八朔を作っていました。その頃、刀根早生・平核無柿の生産が広がり始めた時期でしたが、みかんをなかなか切り替えることが出来ず出遅れました。

そんな中、生産コストを切りつめ、収入を増やす方向でやっていましたが、現在では、安全・安心で美味しい物を消費者に直接届けたいとの想いを持っています。

4年前に息子も就農し、後継者として頑張ってくれていますので、水稻の栽培面積を増やしつつあり、野菜・米などを地域の販売所に持って行き直売するなどして、息子と協力し合って作業をしています。

2. 農業経営の方針と現況

現在では収入の約3割が柿以外となっていますが、目標は半分を柿以外に持っていくたいと考え、果樹と水稻、そして少量ですが、野菜の複合経営を行っています。

柿の価格が不安定な中、水稻と野菜の直売所での販売による売り上げが少しずつではありますが、伸びているので、これを息子の担当としています。

【農業経営の概況】

○作付け品目と面積

柿	180a
(刀根早生90a 富有90a)	
水稻 (コシヒカリ)	170a
トウモロコシ	のべ10a
カボチャ	のべ10a
その他野菜	のべ10a

○労働力

家族4人、臨時雇用2人



水稻は、近隣からの水田等を借り受け、ここ数年で1.7haまで規模拡大してきました。野菜は、直売所を中心に販売していくために、種苗メーカーから常に情報を取り、美味しいものや特徴のあるものなど品目や品種を綿密に検討し、栽培方法にこだわって生産していきたいと思っています。

3. 今後の経営方針

今後、保有している機械・設備を有効活用するため、さらに水稻の規模拡大に力を入れ、柿の生産は少しづつ縮小していきたいと思います。また、雇用労力を確保し、効率よく労働力を回せるようして、柿の農繁期と作業が重ならない野菜（トウモロコシ、カボチャ、ダイコン）を中心に増やしていきたいと思います。

また、幸いにも息子という後継者がいるので、息子が興味を持っている品目、品種について意見を交わし、一緒に取り組みながら、直接販売の割合を増やして経営の安定化に向けた、努力をしていきたいと考えています。

4. おわりに

農業を初めて、35年ほど経ち、何も分からぬままがむしゃらにやってきただけですが、後継者が育ち、これからはそのサポート役に回る時期に来たと思っています。今までやってきた、数々の経験を活かし、次の世代の「百姓」を育てるような活動が出来るようにしたいと思っています。



水稻の収穫作業



直売所向けにカボチャを栽培

私の農業

適地適作を実践!! ～こだわりの温州みかん栽培～

有田川町 指導農業士

三輪 敏郎



1. はじめに

私は、県立農業大学校を卒業後、昭和48年に就農した。

就農当時は一部ネーブル、八朔もあったが、ほぼ温州みかん専作だった。

しかし、昭和47年の温州みかん価格の暴落を受け、温州みかんの半分をネーブルを主とした雑柑に更新。

その後、イヨカン、ありあけ等の栽培にも取り組んだが、現在は温州みかん200aの専作経営となっている。

2. 農業経営の方針と現況

露地栽培にこだわり、積極的に改植による品種更新を行うとともに、適地適作を徹底することで高品質な温州みかんの生産を目指している。

【農業経営の概況】

○作付品目と面積

温州みかん	200a
(品種構成)	
極早生	20a
早生	100a
晩生	20a
丹生系	60a

○労働力

家族4人、臨時雇用2人

(生産面での取り組み)

就農当時、県果樹園芸試験場の研究員さんに施肥について教えていただいた。それまでは多肥栽培が主流であったが、品質を上げるために、当時推奨されていた肥料を少なくする「少肥栽培」に取り組んだ。

こうして栽培した温州みかんは、「特殊みかん」として取引市場で別枠売買され、高い評価を受けた。このような取り組みが各産地で広がる中、県が「味一みかん」ブランドを立ち上げることとなり、昭和58年に我が家の温州みかんが「味一みかん」第1号となった。

現在、少肥栽培は行っていないが、この時、良い物を作れば、それなりの評価が返ってくる事を学んだ。栽培施設の面でも、就農後すぐ県果樹園芸試験場で水利計算の方法を教えていただき、個人で薬剤散布施設を整備し、現在、経営面積の約7割を占めている。また、それまで無かったモノラックも順次設置し、今はすべて完了している。



樹体状況に応じた管理を徹底

栽培品種・系統では、高糖系みかんである丹生系を大切にしている。丹生系の発祥の地である有田川町丹生地区に園地を確保しながら、総面積をほぼ変えずに栽培してきた。このように、「品種に合った土地で作るのが一番」を実践している。今後は、早生と丹生系の二本柱でやっていきたい。

平成3年に極早生温州である日南早生を導入する際には、マルチ栽培を想定して高畝栽培にすると同時に、黒パイプによるかん水設備を整備した。かん水する場合は、品質を揃えるためにも一斉にはせず、樹勢の弱った樹を選んで行っている。これにより、みかんの品質が樹体毎のバラツキなく仕上がる。この高畝園20aを含め、毎年30~40aのマルチ栽培を行っている。



高畝栽培ほ場の株元灌水設備

(販売・流通面での取り組み)

私が就農する前から、20数年間は共同出荷を行っていたが、後継者が少くなり、役員の顔ぶれが固定化され、出荷体制の運営が難しくなってきたと感じ、34才の時に個選へ移行。

個選になった際、自分で出荷箱のデザインを考え、市場に見てもらった。現在も、出荷はこの市場一本で行っている。

3. 今後の経営方針

栽培規模は現状を維持し、大規模経営ではなく、すべての生産物の品質を中位以上に仕上げていきたい。適地適作で品種を選択し、とにかく温州みかん作りにこだわっていきたい。

4. おわりに

農産物の販売手段、市場状況等の違いから、栽培品種や方法は千差万別だが、私の農業経営は、扱い易い温州みかんのみを適地栽培し、品質を保つために、栽培面積はあまり無理のない範囲でといった基本に忠実なだけの新鮮味の無い内容なので、私よりもっと立派な技術を持ち、経営を実践されている方が数多くおられる中で、今回「和歌山の農業士」第1号に原稿を寄稿させていただく事に大変恐縮している。

今年は、5月頃から今までにない少雨、そして夏場の高温状態が続いたが、逆に多雨の年も必ず来ることは間違いない。温州みかんの場合、収穫前の天候次第で、夏までは良かった品質内容が一変する事もよくあるので最後まで気掛かりな作物だが、そこが面白味のある所もある。今のところ、園地の立地条件、品種構成などは自身の理想にほぼ近づいているので、あとは家族共々、温州みかんづくりを楽しんで続けていきたいと思う。

最後に指導農業士に認定された事で、今までとは違った緊張感が生まれた様に思う。今後、皆さんとの雑談の中でも、多少なりとも参考になる事があつたら幸いです。

私の農業

消費者の気持ちを大切にして経営を考える ～時代に応じた果樹・野菜の複合経営～

日高川町 指導農業士

長岡 均



1. はじめに

私は、高等学校を卒業後、長男だったこともあり、親の後を継ぎ、昭和43年に就農した。

就農時には、柑橘を中心に温州みかん40a、夏みかん30a、甘夏5aおよび水稻20aから経営を開始した。

翌年には、パイロット事業で柑橘を増反し、温州みかん150a、甘夏70aにまで規模拡大した。その後も自己資金により畠地を開墾し、増反するとともに、夏みかんを改植、宮内伊予柑の導入も図った。

昭和59年には、水稻の栽培をやめ、ビニールハウスを建設、カンキツとウスイエンドウの複合経営に変更した。その後はウスイエンドウからミニトマトへ切り替え、みかん栽培を縮小、不知火を新植するなど時代の流れに応じた品目の転換を行ってきた。

平成20年には、ハウスを増設してミニトマト（アイコ）の栽培を取り入れ、現在の経営に至っている。

【農業経営の概況】

○作付品目と面積

温州みかん	80a
(うち極早生15a)	
中晩柑類	45a
(甘夏15a、紅八朔10a、不知火20a)	
ミニトマト（施設）	12a

（品種：アイコ）

○労働力

家族2人、雇用2人（臨時）

○出荷先

農協、インターネット、進物販売他

2. 農業経営の方針と現況

常に消費者の動向を見据えたうえで、栽培品目や販売方法などを柔軟に対応できるように心がけている。現在では、ミニトマトと不知火の生産に力を入れ、経営を行っている。

（生産面での取り組み）

ミニトマトでは、集約的な生産を図るために、面積当たりの収量を増やす栽培方法に取り組み、肥培管理と水分管理に留意し、分枝を促し、より多く花房が着くよう努めている。

不知火では、貯蔵期間中の腐敗が問題となるため、栽培方法や収穫後の扱い、貯蔵方法に工夫を凝らし、腐敗率の低下を図っている。



ミニトマトの栽培風景

また、就農当初から、補助事業を活用して、農道の舗装、園内のモノラックの設置等、作業の省力化にも取り組んできた。加えて全園の畠地灌漑を実施し、その設備の一部を利用してスプリンクラー防除を行い、平成15年には無人防除施設の整備も一部実施した。

(販売・経営面での取り組み)

大部分の農産物を農協出荷しているが、市場出荷だけでなく、契約販売を推進するよう農協への提言を行っている。また、最近ではインターネットでの直接販売や進物販売にも一部取り組み始めている。

平成4年からは地域でもいち早くパソコンによる簿記記帳を行い、効率的な経営管理を実施。失敗を最大限活かすことを心がけ、生産性の悪い品目の生産は早急にやめ、生産性の良い品目への転換を図るようにしている。味がのらない温州みかん園や単価の安い甘夏等を減らし、消費者のニーズにあったものを生産・提供することを常に念頭に置いている。



不知火の摘果作業



スプリンクラーによる無人防除



パソコンを用いた経営管理

(農業経営を行ううえでの課題)

重油の高騰が続く中、燃料費が生産コストに占める割合が高くなり、燃料費の削減が大きな問題である。現在、加温機に増設するエコフィン等の導入により、10~15%の重油消費量の軽減を図っている。また、不知火では、安定的な価格維持のための方策を模索しているところである。

3. 今後の経営方針

しばらくは、現在の延長線上で経営を行う予定であるが、市場の情勢等を見ながら柔軟に対応していきたい。また、目前に迫った経営移譲に備え、これまでに身につけた技術や経営の在り方などをいかに継承するかが、重要な課題であるが、スムーズな移譲が図れるような環境作りを行っていきたい。

4. おわりに

色々な農業の形があるので一概には言えないが、消費していただく人々の気持ちになって、それを先取りして栽培、提供していくことが大切だと思っている。

品目は違えども、農業を生業としている農業士同士のつながりを大切にしていく必要があり、TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）の交渉結果も心配だが、グローバル化の中で、国内だけでなく海外に向け、自分達の農産物を宣伝・販売することも重要になると考えている。

私の農業

小さな産地は立地条件を生かし、
技術を高め、自分の製品スタイルを確立
～消費者にお茶の本当を伝える～

白浜町 指導農業士

上 村 誠



1. はじめに

昭和42年、地域が補助事業で茶の生産拡大を展開しており、その一環として父が約1haの開園に着手していましたので、私が県立田辺高校を卒業後、技術・知識研修に静岡県に出向きました（通算2年）。

帰郷後、開園を続けながら植栽（自営育苗）し、それ以降1年も欠かさず、技術・知識を深め、情報を吸収するために年に数回、先進地である静岡へ足を運んできました。結果、栽培・加工・流通面において多勢の方との人脈ができ、地域の茶業の維持、技術、品質の向上に少しだけとも寄与できたと思います。

（手もみ技術を探求）

現在の機械製茶の原点である「手もみ技術」習得のため、平成元年から静岡県手もみ保存会の指導を得て、大正末期まで当地でも行われていた手もみ製茶を復活、その技術は川添茶の品質向上に大きく貢献できたと思っています。

私自身は全国手もみ茶振興会から平成10年に「師範」、平成24年には「茶匠」に認定され、平成19年には和歌山県の名匠として、表彰を戴きました。極々小さな和歌山の茶業ですが、技術には産地の大小は関係ありませんので、これまで自身の技術レベルの確認のため、品評会やコンテストに出品してきました。主力の高品質な煎茶以外に加工方法を変えることにより、紅茶、白茶、釜入り玉緑茶、釜入り日干番茶も手がけ、多くのコンテストで受賞するなどその品質と技術が認められました。

【受賞歴】

全国手もみ茶品評会には毎回出品し、二等5回、三等3回入賞。O-CHAフロンティアコンテストでは平成16年に国産で初めての「白茶」で金賞（一点）を受賞（世界お茶まつりで表彰）。平成17年には「同じ茶畑からお届け四趣」で連続金賞、同18年には手もみ茶「お茶農家の手わざ」で銀賞（二点）を受賞。世界緑茶コンテストでは平成20年に「料理にあわせ好み五趣」で金賞。平成22年には紀州発酵茶二趣「しろ&べに」で最高金賞、紀州緑茶二趣「かわのめぐみ」で金賞ダブル受賞（世界お茶まつりで表彰）。

【農業経営の概況】

○作付品目と面積

茶園	150a
野菜・花き	20a

○労働力

家族2人
臨時雇用 延べ40人



手もみ製茶の作業



世界お茶まつりで受賞

2. 農業経営の方針と現況

(生産面)

昭和38年、川添緑茶研究会が発足。以降JAの製茶工場で製茶作業を行う小規模農家の原料持ち寄りの共同製茶です。生産者、茶樹の高齢化による生産力の低下、園地格差拡大の中で、助け合い意識での共同作業、樹の若返りに取り組み、台刈・中刈剪定での更新作業を行っています。



茶園の様子

(販売面)

約10年前から価格低迷の中で、経営安定を図るため、品質が良くて美味しいお茶を作り、販売結果にどう結びつけるか考え、自ら販売することや六次産業化も必要と感じていますが、技術・知識を要するため、生産者全員が出来ることではなく、全量自販も難しい状態です。

消費を伸ばす上で大事なことは、生産者と流通業者が一体感を持ち、消費者に本当のお茶を伝え、アピールすることであり、食の文化が崩れつつある中でお茶を飲む文化の立て直しも必要です。そのため、食事内容に適したお茶の飲み方を提案し、商材としてのお茶に生産者の想いや知識、産地の情報、機能性等を商品の一部として伝え、手に取りたくなるパッケージ、飲んでみたくなる生産者のコメント等に様々な工夫しています。

また地元での消費拡大も大事なので主力商品である煎茶の消費を伸ばすために、積極的に出向いてのお茶講座（淹れ方、情報等）にも取り組んでいます。



産地でのお茶講座

3. 今後の経営方針

協同加工ですので地域全体の生産力を考えると、課題も多いですが、茶樹の若返りと仕立技術の確立、樹形改善や改植も考え、今は和歌山では希少作物のお茶ですが、紀州番茶をベースにした茶粥の文化も大事にしながら経営の安定に取り組み、産地の拡大を夢見ています。

4. おわりに

若い方には基礎知識、技術をしっかりと身につけた上で、自分なりの理論を組立てて技術を磨いて下さい。自分のレベルを何時も把握確認してください（全国レベルで）。

山間地の多い和歌山県ですが、品質が良く美味しい農産物は山間傾斜地で沢山生産され、高度な技術があります。山間の集落機能を維持していく上での兼業は大事だと思いますが、「農業を続けてゆくにはどうしたら良いのか」の議論、検討が少ないと言っています。自国の食の産業を続け、国土を美しく維持するため必要なことは、日本のやり方として誇ればいいと思います。「進歩・発展」の基準、「豊かさ」の基準はどこにあるのですか。

「手足の先からシビレてどうなる」という先輩の言葉が何時も頭の中にあります。
「醸肥辛甘非真味、真味只是淡」製茶技術の師匠からいたしている言葉です。お茶だけの持つ旨味を大事においしいお茶づくりをしたいと考えています。

私の農業

農業への転職 ～必要に迫られ現在に至る～

那智勝浦町 指導農業士
中 村 誠 一



1. はじめに

私は、38歳で会社を退職、現在の職業に就きました。

以前から、副業としていた養蜂を収入のメインに置きたく取組を始めました。

サラリーマンは収入の面で安定し、良い面も多いのですが、所得を上げたいのと、所得を上げることにより家族に対しての責任を果たさないといけないという緊迫感もありました。

親から事業を引き継ぐという形と違い、最初から得意先の確保や事業基盤を拡大する必要があり、収入の安定性、収益率向上のため直接販売、通販、加工品の商品開発、営業強化に加え、短期間にサラリーマン時代の給与所得をキープする課題がありましたので最初はかなりバタバタしていました。

2. 農業経営の方針と現況

現在は、採蜜とミツロウ採取を中心においた加工品生産・小売り販売を行っています。

東牟婁地域は、採蜜場所としては冬暖かく越冬をする場所としては適していますが、熊野林業の先進地として植林が進み蜜源となる樹木が少ない場所でもあります。

そんな中でも植林の出来ない場所や海岸沿いは5~6月にかけ多少とも花が咲き、年に一度の採蜜期を迎えます。県内では有田ヘミカンの花を求めて採蜜に出かけます。

各作業を組み合わせる事で、農閑期と農繁期の格差を少なくし、年間を通じた製造販売計画が出来るよう調整していますが、どうしても採蜜やお中元・お歳暮の時期には作業に無理が出てしまいます。採蜜は、収量を上げるため、特に見回りをこまめに行い、気温と天気の変化を見てタイミングを外さないよう気をつけることが大事です。急ぐと低濃度になるので糖度計を携帯し、こまめに計測します。雨になると貯めた蜜が蜂の食料として食い込み、半日の遅れが収量に影響します。

【農業経営の概況】

○作付品目と面積

養蜂業

採蜜群 100群

蜂蜜加工 5,000kg

ミツロウワックス他

○労働力

家族 2人、臨時雇用 1人

(現在は初期に比べるといい人員減少)



製品管理は、特にバラツキが起きないよう品質に気を配り細心の注意を払っています。濃度測定器の数値を見ながら振り分け、蜜の香り・味・作業時の気温による結晶凝固等に注意し、異物が入っていないかフィルター濾過・目視検査を行います。さらにサンプルを採取し、業務日誌を保管することで、品質管理に万全を期し、顧客からの苦情や異常時の原因究明にも役立てています。

原料回収率を向上させるため、主にプロポリスの抽出工程を最低でも3回行い、最終段階では遠心分離器を使用し、各濃度で確保できた蜜を目的別に使い分け、濃度調整を行い、沈殿分離して仕上げとします。全ての工程を効率よくするよう日々検討、見直しの毎日です。

まだまだやってみたいことはあります、現在の年齢(57歳)もあり、経営移譲をどうするかがこれから大きな課題になっています。それというのも子供(娘二人)は県外で暮らし、先が読めない状況となっているからです。

今まで支えてくださったお客様に迷惑が掛かることの無いようこれまでに培った技術や知識等の引き継ぎをするとともに、無理な販売拡大にならないよう年間安定供給を志している次第です。

3. 今後の経営方針

農家に定年はありません。でも生身ですから、いつどのようなことが起きるかも分かりません。

最近、よく言われてる南海沖地震や津波に対し、この紀伊半島で仕事をやっていく限り、流通含む事業の危機管理が求められていると思っています。

4. おわりに

今、耕作放棄地が多くなってきました。そのため、人間のエリアに野生動物が多く入ってきて作物を荒らす被害が多くなりました。

30年前では思いもよらないところまで動物たちが入ってきます。反面、人口は減少する一方です。国全体で減少しているのですから仕方が無いことでしょう。

衰退してゆく地域を少しでも活性化するには、もっと地方の良さに関心を持ってもらい、採算性に左右されない価値観が大事なように感じます。利益が上がるるのは当然ですが、それ以上の価値観が今の地方を支えていると感じています。



巣箱から取り出した木枠



商品「山の蜜・みかん蜜」

農業に懸ける想い

人とつながる農業経営を ～地域と農業の活性化を目指して～

紀美野町

宇 城 哲 志



1. はじめに

私は証券会社勤務を経て、平成20年5月に就農した。自己の責任で全て計画し、結果もすべて自身に帰属するというわかりやすさと、食という人の幸せにダイレクトにつながる農業に魅力を感じている。就農を決断するに当たって、両親が農家をしていたこともきっかけになったと思う。

当初は親と一緒に主に果樹栽培をしていたが、徐々に自分の管理する農地を広げ、フレキシブルに需要に対応できる野菜栽培を中心とした農業経営にシフトした。就農5年目の今、飲食店や小売業者・直売・固定客等、多くの取引先ができ、今年の4月、紀美野町内にジェラート店（キミノ一カ）を開店!!。自作の農産物をたっぷり使ったジェラートを提供している。（ジェラート店は、『地域の逸品!!』で紹介!!）

2. 農業への想い・取り組み

全ての仕事に通じることだが、第一にきちんと利益が上がること、それがお客様から支持を頂いていることだと認識している。そのため直売所では直にお客様の声を聴き、レストランへも足を運んで情報を得る。埋もれたニーズを掘ることで、お客様のストレスを減らすよう努めている。

常に、外に出て人と話すことも心掛けており、その結果、バイヤーから市場の動きを学び、専門家と土づくりの相談をすることも出来るようになった。そして、農業は多くの人が注目する産業だと実感している。

今ではジェラート店も軌道に乗り始め、今後、耕作も経営もますます広げていきたいと思っている。そして近い将来、町内に雇用を作り、地域の活性化に貢献し、紀美野町が子供たちと農村地域が一体になれる環境になれば良いなと感じている。

【農業経営の概況】

○作付品目と面積

露地野菜 100a
(カボチャ、トウモロコシ等)

○労働力

家族2人、臨時雇用4~5人



愛用のトラクターとともに



ジェラート店で直売

農業に懸ける想い

契約栽培への取り組み ～水田を利用した野菜栽培を開始～

紀の川市 青年農業士

岡 野 尚 平



1. はじめに

私は、農業大学校を卒業後、2年間の農業研修を経て、JAに就職。8年間勤めたが、以前より農業をしたいとの想いがあつて平成21年に就農した。

それまでは、祖父母がカンキツを中心とした果樹栽培をしていたが、在学中から野菜栽培を学んできたこともあり、水田を利用した野菜等の栽培を始めた。

2. 農業への想い・取り組み

(複合経営への取り組み)

専農指導員として、培った知識や技術を活かし、労力分散し、多様な作物を栽培してみたいとの想いから、水稻、露地野菜の複合経営を行っている。

最近では単価が安定している花き『シャクヤク』を取り入れたいと考え、株の育成を始めた。シャクヤクは、現在、露地で育成しているが、施設栽培も行い、収穫期を分散して長期に出荷することで、経営の主要品目の一つとしていきたいと考えている。

栽培上、特別なことはないが稻わらや緑肥を投入し、できる限り経費や労力を抑えられるよう、過剰な面積拡大はせず、品質・収量を向上できるよう努力している。

(契約栽培や新たな品目への挑戦)

昨年から、JAの勧めによりハクサイの契約栽培に取り組んでいる。その実績から単価が一定で、収益の計算ができるとの感触をつかみ、今年度は、キャベツを追加して契約栽培の面積拡大を計画し、移植機の導入をしていきたいと考えている。

今後は、契約栽培の面積を拡大するとともに、ニンニクやネギなどいろいろな品目に挑戦し、農業を楽しみ続けたい(できれば、パートナーとともに)。

【農業経営の概況】

○作付品目・面積

水稻	80 a
シャクヤク	15 a (育成中)
露地水ナス	10 a
ハクサイ	20 a
白ネギ	10 a
その他	10 a
キャベツ	20 a (予定)

○労働力

家族2人、臨時雇用2人



水ナスの整枝作業



水ナスの箱詰め作業

農業に懸ける想い

～就農して11年～

かつらぎ町 青年農業士
新 岡 愛



1. はじめに

私は、26歳の春に就農しました。短大卒業後5年間和歌山市内の医療関係で仕事をしていましたが、姉の結婚がきっかけで就農しました。

家が農業でも、ほとんど手伝った事のない私は、両親の勧めで、山形県のサクランボ農家に勉強に行きました。

その頃がとても夢があり、楽しい熱い日々でした。

2. 農業への想い・取り組み

それから11年の時が経ち、柿や梅の値段が暴落、桃の値段が低迷していく中、さらに値段の高い梅干しは、売りにくくなり、なにより両親が年老いて私への負担が多くなって来ています。

現在、両親が法人経営をしている中で、私はぶどうをはじめとした夏果実等の生産販売を担当しています。

そんな私が今、かつらぎ町4Hクラブ会長をしています。本来なら20代前半で卒業するのですが、人がおらず若い方で30歳、上は50歳を超える会になっています。町内でも、20代の若者が就農しているのですが、クラブに魅力がないのか、中々入会してくれません。来てくれる若者も数回参加し、『楽しくない』『人になじめない』『メリットがない』と言って続きません。楽しくない、人になじめないのは当然です。数回で何がわかるのでしょうか。メリットがないって、一体どんなメリットなのでしょうか。

良い話、良い仕事、良い条件も、家で毎日、同じ人の話を聞いていてもやって来ません。外に出て、人の話を聞き、自分の意見を負けずに言い続け、自分の考えを他人に伝える力がないと話しありません。メリットとは相手の情報を受け止め考えることで、初めて出てくる芽のようなものであり、苦しみ、もがきもないで手に入る物ではないと私は思います。私はこの会に入って人と話すメリットをみつける事が出来ました。若い就農者の方には、自分のカラに閉じこもらず、もっと外に出て、多くの人達と話す機会を増やし、たくさんの情報の中から、自分のメリットを見つけ出して欲しいと思います。

【農業経営の概況】

○作付品目と面積

モモ	30a
力キ	140a
(刀根早生 90a 平核無 50a)	
みかん	30a
梅	20a
キウイフルーツ	30a
ぶどう (ピオーネ)	20a
ジャバラ	200a
加工食品 (あんぽ柿、梅干し)	

○労働力

家族3人、常雇用2人、
臨時雇用6人



ぶどうの収穫作業

農業に懸ける想い

収益性の向上をはかる ～高品質果実生産の実現～

湯浅町 青年農業士

井 上 芳 信



1. はじめに

私は、県立農業大学校を卒業後、2年間アメリカコロラド州の畑作農家において派米研修を受けたのち、平成9年に就農した。

就農当時、かん水用スプリンクラーとモノラックはほぼ全園にあったが、防除用スプリンクラー設置園はごく一部であったため、整備を進め、現在ではほぼ全園に設置している。これにより省力化をはかることができ、さらに園地を借り、購入することで、経営規模を440aまで拡大することができた。

2. 農業への想い・取り組み

現在、温州ミカンを中心とした果樹専作経営を実施。

温州ミカンの収量、品質向上対策として、サンゴジュ、マキ等の防風樹から防風ネットへの変更をすすめている。サンゴジュやマキでは、園内に日陰ができ、枝数が減少するとともに、チャノキイロアザミウマの発生源となるため、現在も継続して変更に取り組んでいる。

さらに毎年、温州ミカンの一部園地でマルチを敷設し、点滴かん水を併用することで、高品質果実の安定生産を目指している。

また、地域の中では、6年ほど前に鳥獣害対策組合を立ち上げ、防護柵の設置を進めるとともに、狩猟免許を取得、自ら捕獲にも取り組んでいる。

今後も、防風樹から防風ネットへの変更等、果実品質の向上をはかるとともに、現在の早生中心の温州ミカンの品種構成から晩生を徐々に増やし、地域の仲間と高品質果実生産に取り組んでいきたい。

【農業経営の概況】

○作付品目と面積

温州ミカン 340a
(極早生40a, 早生200a,
中晩生100a)

中晩柑(清見等) 75a
ビワ 25a

○労働力

家族 4人、常雇用 1人、
臨時雇用 6人



整備した防風ネット



摘果作業の様子

農業に懸ける想い

「日に新た」

御坊市 青年農業士

西 本 史 人



1. はじめに

私は、農業者大学校を卒業後、実家の農業を継ぎました。父は私が小学生の時に病気で倒れたため、20aのガーベラを親戚の方に作ってもらい、母がそこに手伝いにいく状況でした。その親戚で、2年ほど勉強させてもらった後、母と二人、ガーベラの栽培を始めました。

現在は、鉄骨ハウス20aと4年前に建てた低コスト耐候性ハウス10aに加え、親戚の鉄骨ハウス20aを作らせてもらい、合計50aでガーベラを栽培しています。

2. 農業への想い・取り組み

ガーベラ栽培で一番の悩みの種は土壌病害です。疫病、半身萎凋病などの病気が出て株を枯らします。仲間と情報を交換しながら、自分でも毎年植え替えの時はやり方を変え、改善するようにしています。その甲斐あってか、年々少しずつですが、枯れ上がりが減少、株が長持ちするようになってきたと感じています。今年は薬剤での土壌消毒をやめ、新たな方法にチャレンジしています。

【農業経営の概況】

○作付品目と面積

ガーベラ 50a

○労働力

家族2人、臨時雇用3人



ガーベラの開花状況をチェック

ガーベラは繊細な植物で、水や肥料のやり方などの少しの変化で、収量が大きく変わります。これには、もう色々と試すしかないと思っていて、その積み重ねでしかレベルアップが出来ないのではないかでしょうか。

また、日々の作業の中では現状にとらわれない考え方をする必要があるなと感じています。水のやり方一つとっても、今まで良いとされていた方法は本当に適切なやり方なのかと疑ってみると、そういう『日に新た』の気持ちを持って仕事をしていれば、現状に甘んじることなく、良い仕事ができるのではないかと考えています。

私は今、大きな岐路に立っています。もう少し規模拡大をと思うのですが、施設栽培なので資金が必要ですし、40aの鉄骨ハウス資材の更新時期も迫っています。他の作物にも目を向ける必要があるなとも感じ、今はとにかく、色々な場所・物・人に触れ、もっと広い視野で農業を捉えたいと考えています。これを読まれている農業士の皆様にも色々と相談し、勉強できればと思いますので、機会がありましたら御指導よろしくお願いします。

農業に懸ける想い

努力は必ず報われる! ～テーマは絆～

田辺市 青年農業士

高田直幸



1. はじめに

私は、小学校高学年の頃から、農業を継ぎたいという思いがあり、高校・短大と農業系の学科に進学し、短大卒業後、10年前に就農した。

当時より梅とみかんの複合経営をしているが、私が就農後、みかんから梅への転作を進め、梅中心の家族内労働力による複合経営を行っている。

2. 農業への想い・取り組み

農業を取り巻く環境は年々厳しさを増し、ただ作れば売れるという時代ではないので、高品質は当然ながら、安心・安全といった付加価値のついた農産物づくりを目指している。さらに安定的な収量確保のため、平成21年に梅の新品種として登録されたNK14を南高の間に交配樹として植え、さらなる収量アップを目指している。

就農して10年経つが、まだまだ分からぬ事や、失敗する事も多い。農業に正解なんてないとは思うが、努力は必ず報われると思うし、成功への一番の近道は、成功するまで失敗し続ける事、そして、諦めない事だと思うので、これからも試行錯誤を繰り返し、失敗を成功へのワンステップに変えていきたい。

幸い、私の地域には、同世代の若い後継者が多く、4HクラブやJA青年部活動などを通じて知り合った盟友と、情報交換や切磋琢磨しあえる。

そういう『絆』という名の、縦の尊敬と横の連携を大切に、今後も一步一歩のこの道を突き進んで行きたい。

【農業経営の概況】

○作付品目と面積

梅	150a
みかん	30a

○労働力

家族3人



梅の天日干し作業

県農業大学校学生です！

～2年生の自己紹介&近況報告～



明 渡 邦 弘

私は和歌山市出身で、実家は米とキャベツを作っている農家です。趣味はソフトテニスとバドミントンです。農大でもバドミントン部に入っていました。

現在、野菜コースでイチゴの栽培に携わっています。卒業論文では、和歌山のオリジナル品種「まりひめ」を使い、低温・短日・低窒素による花芽分化促進の研究をしています。効果の確認されている夜冷育苗処理ではなく、予冷庫を使用した暗黒低温処理の研究をしています。

出身地は橋本市高野口町です。趣味は川釣りやプラモデル作りです。今、大学で取り組んでいる卒業論文のテーマは、メロンのエソ斑点ウイルスに対する抵抗性品種の特性についての研究です。

大学卒業まで半年も無いので頑張っていきたいと思います。



石 倉 健太郎



岡 智 也

出身は温州みかんの品種の一つであるゆら早生が発見された町である由良町です。農大では果樹コースを専攻しており、ブルーベリーを担当しています。趣味は卓球と野球観戦で、高校の時には応援団に入っていました。

私の家は田辺市で梅を栽培しています。そのため梅や果樹について知りたいと思い、果樹を専攻しています。学校では農薬散布や施肥、剪定方法などを教わりました。

卒業論文も梅をテーマにしたもので、剪定枝を燃やした炭で連作障害を防げるかの検証をしています。将来は就職の後、実家の農業を継ごうと考えています。



小 川 竜 矢



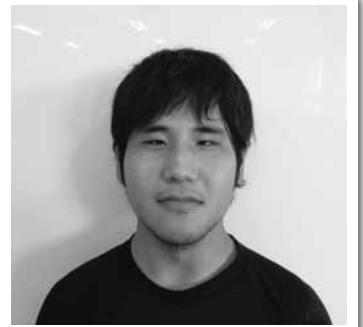
川 嶋 祥太郎

僕は有田市新堂出身です。農大では果樹を専攻しており、ブドウの栽培管理を担当しています。

実家が温州みかんを栽培しており、卒業後は自家就農しようと考えており、農大で学んだ知識を活かし他の果樹品種も導入しようと思っています。趣味は磯釣りとスノボーです。

和歌山市出身です。趣味は、読書と料理の研究です。読書は、推理小説と哲学と人生論の本を読んでいます。料理は、ジャガイモとピーマンの美味しい組み合わせを考えています。長所は優しいところで、短所は短気なところです

将来は農業関係に就職した後、就農したいと思ってます。



高橋杜弥



田代悠

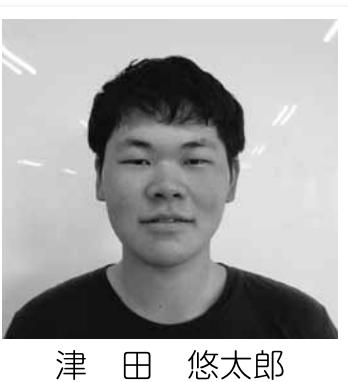
家は海南市です。趣味は読書と散歩、昼寝も好きです。最近は料理にもはまっています。農業大学校の寮ではサボテンを育てていますが、いっこうに花が着かなくてちょっと悩んでいます。学生生活はもう残り少ないので、将来に役立てていけるように精一杯頑張ります。



龍見拓真

田辺市出身です。僕の趣味は読書です。主にミステリー小説が好きです。暇さえあれば本を読んでいます。あとは、たまにゲームをするぐらいです。

実家は梅の農業をしているため将来は継ごうと思います。



津田悠太郎

出身地は紀の川市です。趣味は将棋と音楽鑑賞です。将棋では友達と対局したりテレビを見ながらやっています。音楽はJ-POPをよく聞いています。

卒論では、加工用トマトの裁植密度や栽培方法の違いによる品質の差を研究しています。

出身は田辺市で、果樹コースを専攻しています。趣味は海釣りです。農業が好きなので果樹、野菜、花きについて色々学び、いろんな事に挑戦していきたいと思います。

JJAにも就職が決まったので、しっかり働きたいと思います。



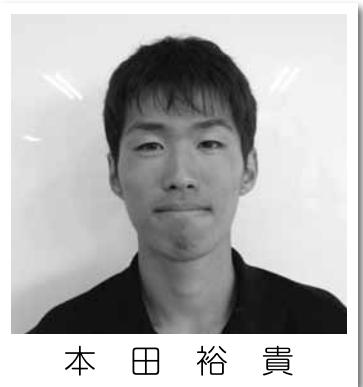
中山将誓



根 来 亮

私の出身地は紀の川市です。趣味は、パソコンです。特に、インターネットを使って分からぬ単語や意味が出た場合、パソコンを使って解決しています。卒論は、バラの新品種の品質調査をしています。

自分は優しくて物を大切にする人です。出身地は紀の川市。趣味は家庭菜園で今までにメロンやトマト・ゴーヤなどを作ったことがあります。
将来の夢は農業に携わる仕事に就き日本の農業を支えることです。



本 田 裕 貴

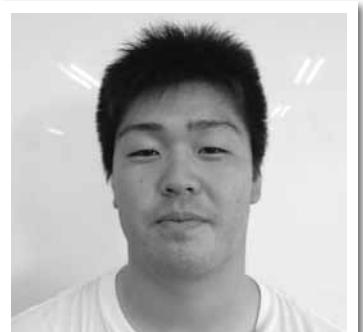


松 本 恵 真

高野山の出身です。農業大学校では花きコースを専攻しています。寮生活などで友達と毎日楽しく過ごしています。花店など花に関わる仕事に就くために就職活動をしています。卒業まで残りわずかですが、勉強頑張ります。

私は、和歌山市に住んでいて、兼業農家で米を作っています。高校時代は、レスリングをやっていて、インターハイに出場しています。

学校では、野菜班に入っています。将来の夢は、公務員になる事です。現在、彼女募集中です。話をしたい女性は、学校に来てください。大歓迎です。



三 木 稔 倫



南 方 一 樹

僕は和歌山市布引出身です。高校は工業高校でしたが、実家が農家なのもあり、農業大学校に進学しました。

小学校から高校までは、バスケットボールをしていました。スポーツは大好きです。

卒業後は就農して、少しでも親の負担を軽減できるようにしたいです。これから先、農業に携わるにあたり、地域の農業の底上げに貢献できたらいいなと思っています。持ち前の体力で、精一杯努力したいです。

地域の逸品!!

農家がつくるジェラート!!

Kiminoka(キミノーカ)

紹介者 紀美野町 地域農業士
古田好美

2013年4月26日、紀美野町に農家が作るジェラート店「kiminoka(キミノーカ)」が開店しました。店主であり農業も営む宇城哲志さんは、素材の味がそのまま引き出せるジェラートに興味を持ち、この度オープンされたそうです。

農家のジェラート屋さんなので、フレーバーには旬の素材をたっぷり使用し、その種類も豊富です。常に6種類のジェラートを店頭に並べていますが、行くたびに新しい商品が登場しています。イチゴ、桃、キウイフルーツ等のフルーツから、珍しいところでは山椒、ビート、トウモロコシ等、毎日手作りしているジェラートはそれぞれ素材の味が引き立っています。きっと全種類食べてみたくなりますよ。



シングル310円、ダブル360円。宇城さんが作る農産物の販売コーナーもあります。ホームページも開設しています。そちらもご覧下さい(キミノーカで検索)。

店舗:〒640-1221 海草郡紀美野町三尾川1785-3
営業時間:平日(11:00~17:00)、休日(10:00~17:00)
定休日:月曜日(祝日の場合は翌日)

安心・安全に育てたジャバラはまるごとおいしい ジャバラピール&ジャバラ果汁

紹介者 かつらぎ町 青年農業士
新岡愛

和歌山県の宝樹 ジャバラ

新岡農園ではいち早く、かつらぎ町の山間部で、ジャバラの栽培に取り組み始めました。独特の香りと苦味が特徴のジャバラは、最近の研究で高い抗酸化作用を持つフラボノイド成分のひとつである(ナリルチン)を非常に多く含むことが判ってきました。



特に果皮には果汁の約6倍もの含有量があると言われていますジャバラ商品を紹介します。

商品紹介

①ジャバラピール	80g (化粧箱入り)	1,000円
	50g (パック入り)	500円
②ジャバラ果汁	内容量 100ml	700円

お問い合わせ先

〒649-7164 和歌山県伊都郡かつらぎ町窪300

農業生産法人 有限会社 新岡農園 Tel.0736-22-5830 Fax.0736-22-8722

HPアドレス <http://www.shinoka.co.jp> (新岡農園で検索)

Email:shinoka@mbf.ocn.ne.jp

はないいちご農園の 「イチゴのクラッシュアイス」

紹介者 美浜町 地域農業士
久保 博巳



美浜町には最大幅約500m、全長4.6kmに及ぶ広大な松林が広がっています。かつてそこで採集される枯れ松葉は、お風呂の焚きつけ時に使用するなど生活に欠かせないものでしたが、近年では電気やガスが普及し、枯れ松葉の処理が問題となっています。

また、すぐどかき(落ち葉かき)は松の生育にも良いため、続けていく必要があります。そこで、枯れ松葉を何かに再利用出来ないかということで、美浜町農業経営者協議会が松葉堆肥作りを始めました。

平成21年度に松葉堆肥ブランド研究会が立ち上がり、平成24年度には7戸の農家が松葉堆肥を使用、松キュウリ、松トマト、松イチゴを生産しています。その中でも、松イチゴを生産しているはないいちご農園では、期間限定でイチゴのクラッシュアイスを販売しています。

和歌山県オリジナル品種の‘まりひめ’を完熟状態で収穫し、その日の内に冷凍保存し、クラッシュアイスにしたイチゴの上にバニラアイスをのせ、オリジナルのイチゴソースをかける事により新食感を味わえるスイーツです。

生産者が夏でも消費者にイチゴを食べてもらおうと企画し作られました。アイスをのせた物は期間限定販売ですが、クラッシュアイスにしたイチゴはインターネットでも販売しています(『はないいちご農園 クラッシュアイス』で検索)。

和紅茶いろかわ!! 両谷園

紹介者

那智勝浦町 青年農業士
松 本 安 弘

両谷園は、「安心して飲んでもらえるお茶を作りたい」との思いで創業した1982年以来、一切農薬を使わずお茶を作っています。茶産地・色川の長い伝統や、創業者の榎本氏の思いを大切に、20~60代の多彩なメンバーが適材適所で協力しあっています。



煎茶、ほうじ茶等のほか、タンニン豊富な2番茶を原料とした紅茶作りにも20年以上取り組んでいます。原料茶の品種はやぶきたが中心で、ストレートで飲んでおいしい、やさしい味です。ミルクティでお楽しみいただく際は、かなり濃くいれてください。手軽に楽しめるティーバッグもありますが、おすすめはリーフ。沸きたての熱湯を注ぎ、よく蒸らすと、紅茶のおいしさが最大限引き出せます。

お買い求めいただくには、両谷園から個人のお客様への直販（送料お客様負担にて郵送）のほか、那智勝浦町・新宮市内、和歌山市内等にも取扱店があります。詳しくは下記連絡先までお問い合わせください。

お問い合わせ先

農事組合法人両谷園 TEL.0735-56-0322 FAX.0735-56-0333

HPアドレス <http://www.zb.ztv.ne.jp/ryokokuen>

Email:ryokokuen@zb.ztv.ne.jp

紅茶いろかわ 50g 450円 100g 630円 150g 900円

送料一律500円（東北・北海道・沖縄は別料金）

※表示価格は、両谷園直販の場合です。お店でお買い求めいただく場合、お店によって価格が異なる場合がございます。

試験研究レポート

REPORT

梅調味廃液添加鶏ふん堆肥の施用がハクサイの収量に及ぼす影響 ～収量・品質は化成単用とほぼ同等、塩分の影響はなし～

和歌山県農業試験場 環境部 副主査研究員 橋 本 真 穂

1. はじめに

梅干製造過程で発生する梅調味廃液の特徴（有用成分が多い一方で塩分が高く、強酸性である）を利用し、鶏ふん堆肥製造時に梅調味廃液を添加することで、悪臭成分の一つであるアンモニアの揮散を抑制することができます。

プロイラー鶏ふんに梅調味廃液5%と副資材として第一磷酸アンモニウム2.5%を添加して鶏ふん堆肥を製造すると、堆肥製造期間中のアンモニア揮散量は無添加に比べて約50%低減することができます（図1）。また、肥料成分である窒素、リン酸の含有率を増加させることができます、塩分含有率も増加することがわかりました（表1）。

そこで、プロイラー鶏ふんに梅調味廃液と第一磷酸アンモニウムを添加して製造した鶏ふん堆肥を施用してハクサイを栽培し、収量や品質、栽培後の土壌に及ぼす影響について調査しました。



写真1 梅調味廃液を利用した鶏ふん堆肥製造の様子

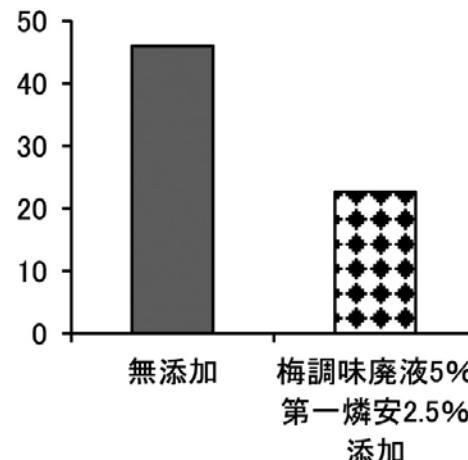


図1 梅調味廃液と第一磷酸アンモニウムの添加が堆肥化期間中のアンモニア揮散量に及ぼす影響

注) プロイラー鶏糞5kgを小型堆肥化装置(かぐやひめ)で堆肥化

2. 材料および方法

試験区は梅調味廃液添加鶏ふん区、慣行鶏ふん区、化成単用区とし、梅調味廃液添加鶏ふん区は原料鶏ふんに梅調味廃液5%と第一磷酸アンモニウム2.5%を、慣行鶏ふん区は梅調味廃液と同量の水をそれ

ぞれ添加し3か月間堆肥化した鶏ふんを供試しました（表1）。鶏ふん施用区は基肥の化成肥料施用量を化成単用区の1/2、鶏ふん施用量は基肥窒素施用量の1/2相当としました（表2）。

表1 供試鶏ふん堆肥の品質

堆肥	C/N比	窒素 (%)	リン酸 (%)	カリ (%)	石灰 (%)	苦土 (%)	塩分 (%)
梅調味廃液添加鶏ふん	10.1	3.63	8.48	3.97	6.97	1.46	2.76
慣行鶏ふん	11.3	3.50	5.05	4.30	8.05	1.34	1.48

注) 乾物当たり

‘きらぼし85’を2012年9月20日に畝幅130cm、株間35cm、2条植えで定植し、12月5日に収穫しました。

3. 結果

収穫期のハクサイの収量は、慣行鶏ふん、梅調味廃液添加鶏ふんとともに化成単用とほぼ同等でした(図2、写真2)。ハクサイの無機養分含有率は、窒素、リン酸については化成単用区に比べて鶏ふん施用区で低下する傾向を示しました。塩分含有量はほぼ同等となりました(表3)。栽培後土壌の塩分含有率は化成単用に比べて鶏ふん堆肥施用区で増加しましたが、梅調味廃液添加鶏ふん堆肥の施用による増加は認められませんでした(表4)。

表2 各試験区の基肥施用量

試験区	鶏ふん堆肥 (現物施用量)	化成肥料施用量		
		窒素	リン酸	カリ
梅調味廃液添加鶏ふん	600	10	10	10
慣行鶏ふん	625	10	10	10
化成単用	0	20	20	20

注) 鶏ふん堆肥の窒素肥効率は50%とした。

追肥は化成肥料を用いて窒素:リン酸:カリ=10:27:10 (kg/10a)となるように2回施用した。



写真2 収穫時のハクサイ

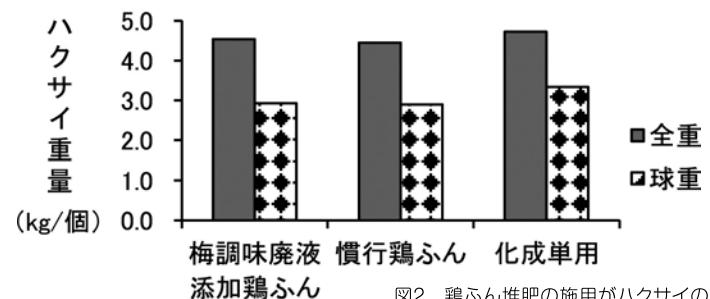


図2 鶏ふん堆肥の施用がハクサイの収量に及ぼす影響

表3 鶏ふん堆肥の施用がハクサイの無機養分含有率に及ぼす影響

試験区	窒素(%)		リン酸(%)		カリ(%)		塩分(%)	
	球	外葉	球	外葉	球	外葉	球	外葉
梅調味廃液添加鶏糞	3.06	3.04	1.50	1.25	5.33	7.81	0.21	0.42
慣行鶏糞	3.30	3.49	1.67	1.37	5.83	8.13	0.16	0.36
化成単用	3.79	3.97	1.95	1.44	6.99	7.00	0.35	0.42

表4 鶏ふん堆肥の施用がハクサイ栽培後土壌のpH、EC、および塩分に及ぼす影響

試験区	pH (H ₂ O)	EC (mS/cm)	NaCl (mg/100g)
栽培前	6.92	0.07	1.6
梅調味廃液添加鶏糞	6.19	0.10	4.7
慣行鶏糞	6.13	0.15	6.6
化成単用	6.25	0.13	2.5

4. おわりに

プロイラー鶏ふんに梅調味廃液を添加して鶏ふん堆肥を製造すると、堆肥の塩分含有率は増加するが、ハクサイに施用しても化成単用や慣行鶏ふんとほぼ同等の収量、品質が得られ、塩分の影響は認められません。

この成果とウメへの施用を検討した成果とをあわせて「梅調味廃液添加鶏ふん堆肥の施用マニュアル」を作成して配布するとともに農業試験場のHP上で公開しています。

試験研究レポート

REPORT

黄色のモモ新品種「つきあかり」

和歌山県果樹試験場かき・もも研究所 主査研究員 堀 田 宗 幹

1. はじめに

モモの果皮・果肉色には白肉タイプと黄肉タイプがあります。生食用のモモはこれまで白肉品種がほとんどを占め、黄肉品種は酸味が強く、多くが加工原料として利用されてきましたが、近年、育種により生食用の黄肉品種が増加しています。

平成22年に品種登録されたモモ「つきあかり」は、(独)農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所が育成した黄肉品種であり、7月中下旬に収穫できる食味良好な品種です。当研究所では平成13年に開始された系統適応性検定試験から「つきあかり」の調査を行っており、以下で品種特性や現在までの調査結果について紹介します。

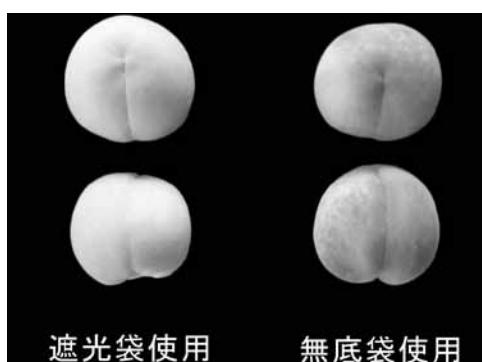
2. 品種特性および和歌山県での適応性

「つきあかり」は、種子親を「まさひめ」、花粉親を「あかつき」として交雑され、樹姿は開張性と直立性の中間で、樹勢は強めです。花芽の着生が多く、花粉が有り自家結実するため人工受粉は不要です。果実は扁円形で玉揃いは良好です。果皮、果肉とも黄色ですが、光を受けると果皮が赤く着色し、果皮を黄色に仕上げるには遮光袋の使用が必要です(第1図)。「黄金桃」に比べ果面は滑らかで肉質は緻密です。

第1表に当研究所での果実調査結果を示します。収穫時期は「清水白桃」とほぼ同時期の7月中下旬です。果実重は260~320gで、4kg箱で12~15玉が中心となります。「清水白桃」と比べて硬核期の肥大は緩やかですが、収穫前に急肥大します。平均糖度は15.2%と非常に高く、食味に優れています。調査開始以降、数年は酸味をほとんど感じませんでしたが、近年はやや酸味のある果実が多くなっています。

3. 栽培上の課題

果皮を黄色く仕上げるには遮光袋が必要であり果実の顔が見えないため、白肉品種と比べると収穫適期の見極めが困難です。収穫時期が早すぎると酸味が強く果肉が硬く、遅すぎると枝の押し傷が目立ちみつ症が発生します。現在当研究所では、「つきあかり」の適期収穫方法について検討を行っています。



第1図 果実袋の違いによる「つきあかり」
果実外観の相違

第1表 「つきあかり」および「清水白桃」の果実品質

品種	年次	収穫始期	収穫終期	糖度 (Brix%)	酸度 (pH)	果実重 (g)
「つきあかり」	H25	7月14日	7月26日	17.7	4.3	329.0
	H24	7月20日	7月30日	14.5	4.1	320.9
	H23	7月25日	8月4日	13.1	4.0	268.7
	H22	7月23日	8月3日	15.3	4.8	307.9
	H21	7月16日	7月24日	18.0	4.5	318.4
	H20	7月16日	7月29日	16.3	4.9	299.3
	H19	7月9日	7月16日	14.6	4.9	297.0
	平均	7月17日	7月27日	15.6	4.5	305.9
「清水白桃」	H25	7月17日	7月26日	13.2	4.6	323.4
	H24	7月18日	7月30日	11.3	4.7	321.7
	H23	7月24日	8月5日	12.0	4.8	350.7
	H22	7月23日	8月2日	13.8	4.8	364.5
	H21	7月16日	7月24日	12.1	4.7	317.2
	H20	7月21日	8月1日	13.3	5.0	315.0
	H19	7月18日	7月24日	12.1	5.1	323.4
	平均	7月19日	7月29日	12.5	4.8	330.8

試験研究レポート

REPORT

果皮被覆資材によるウメの果皮障害「黒点症」の軽減効果

和歌山県果樹試験場うめ研究所 副主査研究員 城 村 徳 明

1. はじめに

近年、本県のウメ産地では、成熟期の果実に褐色や赤色の小斑点が多数みられる果皮障害「黒点症」が年により多発し、大きな問題となっています（写真1）。

これまでの試験結果から黒点症の発生メカニズムは、幼果期以降の多雨による表皮ワックス量の減少と成熟に伴う果皮の老化により、水滴が果皮に長時間付着することで機能不全となった気孔や毛じ痕から水が表皮組織に侵入し、一種の防御反応が起こることで発生する生理障害であることが明らかになっています。

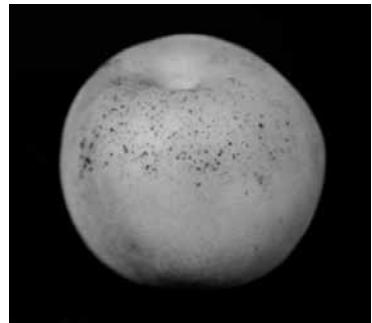


写真1 ウメ黒点症果実

そこで、水が果実の表皮組織に侵入するのを防ぐため、果皮を被覆する資材の散布により、黒点症の発生に及ぼす影響を検討したので紹介します。

2. 果皮被覆資材の散布による黒点症の軽減効果

うめ研究所内アクリルハウス内植栽の12年生の‘南高’を6樹供試し、2013年4月5日から薬剤散布の前日、当日及び翌日を除き落果が終了した7月3日まで毎日樹上散水（小型スプリンクラーにより8:00～18:00に約25mm/日）しました。資材の処理は主枝単位を行い、果皮被覆資材としてマシン油乳剤95%（200倍）とパラフィンワックス系展着剤（1000倍）、果皮の細胞強化を目的としてカルシウム剤（1000倍）をそれぞれ3主枝ずつ処理しました。マシン油乳剤95%は5月15日～6月11日まで2週間毎に3回、その他の資材は4月4日～6月11日まで2週間毎に6回散布し、6月13日～7月3日に完熟落下した果実の黒点症発生率を調査しました。

黒点症の発生率は、果皮被覆資材として散布したマシン油乳剤95%区とパラフィンワックス系展着剤区では4.3%、5.5%と低くなりましたが、果皮細胞強化目的のカルシウム剤区と対照区では、33.0%、27.9%と高くなりました（第1表）。

第1表 敷布資材別の黒点症の発生

試験区	発生程度別発生率(%)			合計
	重症	中症	軽症	
マシン油乳剤9.5%	0.7	0.7 b	2.8 b	4.3 b
パラフィンワックス系展着剤	0.7	1.4 ab	3.4 b	5.5 b
カルシウム剤	8.1	8.3 a	16.7 a	33.0 a
対照	6.8	7.1 ab	14.0 a	27.9 a
有意性	ns	*	**	*

注) 発生程度:重症(小斑点数100以上)、中症(30以上100未満)、軽症(30未満)
合計:発生程度重症～軽症の合計
異なる符号間にTukeyの方法により、*は5%、**は1%水準で有意差があることを、nsは有意差がないことを示す(n=3)

3. まとめ

黒点症は果実が多量の水にさらされると助長されることから、パラフィンワックス系展着剤等の被覆資材を散布することで降雨等から果皮を保護し、表皮組織への水の侵入を阻止し、発生が抑制されたと考えられました。しかし、マシン油乳剤95%は、現地試験で薬害発生が認められたため、今後、散布濃度・時期を検討したいと考えています。また、耕種的防除として、果皮に付着した雨水が乾きやすいように密植や着果過多を避け、風通しを良くすることも重要と考えています。

普及活動レポート

REPORT

夏期栽培に適したホウレンソウ・コマツナ 有望品種の検討

海草振興局 農業振興課

1. はじめに

和歌山市の砂地地帯では、ショウガの後作としてホウレンソウなどの軟弱野菜の栽培が盛んに行われている。しかし、近年は気象変動が大きくなり、夏期のホウレンソウ栽培では、高温等を原因とする生育不良や立ち枯れ等の障害(写真1,2)が多く発生している。

海草振興局では、夏期における軟弱野菜の安定生産を普及課題の一つとして捉え、河西農業士会およびJAわかやま、山本種苗等関係者と協力して、夏期の高温期においても安定的に生産できる、地域に適合した有望品種の探索を行ってきた。

ここでは、その活動を紹介する。

2. 平成24年度の取り組みと結果

河西農業士会およびJAわかやま、山本種苗と試験品種を検討し、7～8月にかけてホウレンソウ2品種、コマツナ5品種の比較試験を実施した。平成24年7月31日に河西農業士会と現地検討会を実施し、品種の検討等を行った。ホウレンソウでは、有望と考えられる新品種を選定できなかった。コマツナでは、当地域の夏期栽培に適した有望品種として、「ひとみ」(トーホク)を選定した。

3. 平成25年度の取り組みの内容

(1) ホウレンソウ・コマツナ品種比較試験

昨年度の結果を踏まえ、河西農業士会およびJAわかやま、山本種苗と試験品種について検討した。本年度は7～9月にかけてホウレンソウ4品種、コマツナ3品種の比較試験を計画している(表1、2、写真3)。

(2) ホウレンソウ・コマツナ品種比較試験現地検討会の実施

平成25年8月16日、中洲出荷組合および現地ほ場において、7月播種分の現地検討会を実施した(写真4)。有望品種の選定には、引き続き比較試験および現地検討会の実施が必要なため、9～10月にかけて8月・9月播種分の現地検討会を計画している。

4. 今後の取り組み

引き続き、品種比較試験と現地検討会を実施し、有望品種の選定作業に取り組んでいく。

本年度は、ホウレンソウ・コマツナ有望品種候補を各2品種程度選定する計画である。

表1 ホウレンソウ品種比較試験供試品種
品種名

試験品種
ワルトラスター(朝日興行)
サマートップセブン(中原採種場)
プログレス(サカタのタネ)
ベストイレブン(ナント種苗)
慣行品種
ニューサマー(山本種苗)
マジエスタ(トキタ種苗)
スクープ(ナント種苗)
ミラージュ(サカタのタネ)



写真1 ホウレンソウの生育不良

表2 コマツナ品種比較試験供試品種
品種名

試験品種
里きらり(武蔵野交配)
里ごころ(三芳交配)
里しづく(三芳交配)
慣行品種
なつき(トホク)
なつみ(トホク)
ひとみ(トホク)



写真2 ホウレンソウの立ち枯れ



写真3 ホウレンソウ品種比較試験



写真4 現地検討会

普及活動レポート

REPORT

「まりひめ」導入によるいちご産地の活性化

那賀振興局 農業振興課

1. はじめに

まりひめは、早生種で糖度が高く、食味の良い県育成品種で、当地域には平成21年度より導入された。この品種は、主力品種「さちのか」よりも収穫時期が2週間程度早いため、これらの品種を組み合わせて栽培することで、12月上旬から収穫できるため、収益増加になり、当地方のいちご産地の活性化が期待できる。そこで、同品種の栽培拡大を推進するとともに、問題となっている育苗期の炭そ病対策に取り組んだ。



「まりひめ」高設栽培

2. 普及活動の経過

- (1) 「まりひめ」の栽培は、当地方では平成21年より本格的に始まり、年々微増傾向にある。しかし育苗期から炭そ病が発生し、特に定植後の株は萎凋症状が発生するため、早急に炭そ病の防除対策を提案する必要があった。
- (2) 本病は、病原菌に潜在感染した親株が苗床へ持ち込まれ、風雨や頭上からのかん水の水滴で飛散し伝染する。そのため、生産者が取り組みやすい設置経費が安価で、簡単に設置できる低コスト育苗システムを模索していた。
- (3) 実証圃の設置にあたっては、那賀地方いちご生産組合連合会役員会（JA宮農担当含む）で協議し、4か所の設置を決定した。
- (4) 当管内の育苗管理方法は、地床露地ポット30%、高設育苗35%、雨よけ高設育苗20%、雨よけ底面給水育苗5%、その他10%である。かん水方法は、頭上かん水が90%を占めるため、施設内でも炭そ病の発生が抑制されない。そのため、親株や定植苗の育成では、イチゴの地上部に水滴のかからない底面給水育苗を利用した育苗技術を確立し、地域への普及を図った。

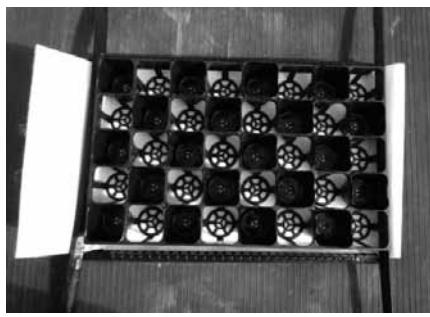
3. 活動の成果

(1) 底面給水育苗の効果

定植苗の育成では、底面給水育苗と薬剤散布の併用で、育苗中の炭そ病が抑制され、十分な量を確保することができた。また、安価で簡易な高設育苗法（果樹用コンテナを二段に積み、直管パイプと花壇用トレイを台に、かん水チューブを2本設置）の実用性が今回の実証圃で確認できた。生産者からは、「晴天日が続くと、毎日手かん水が必要であるが、底面給水育苗では2～3日に1回程度（約40分/6,000株）のチューブかん水ですみ、労力が大幅に軽減された。育苗始めは、多少の萎れが発生するが、10日程度でポット底穴より根が伸長するので、その後の管理が容易であった。」との意見をいただいた。



底面給水育苗「まりひめ」



設置状況



底面給水育苗「紅ほっぺ」

(2) 炭そ病防除の実証試験

炭そ病発生株率は、「まりひめ」では底面給水区で4.5%、頭上かん水さし苗セル区14.6%に比べ低く、高い防除効果が認められた(図1)。一方、「紅ほっぺ」は、それぞれ3.7%、4.0%と処理間に差はなく、炭そ病抵抗性があるものと考えられた(図2)。

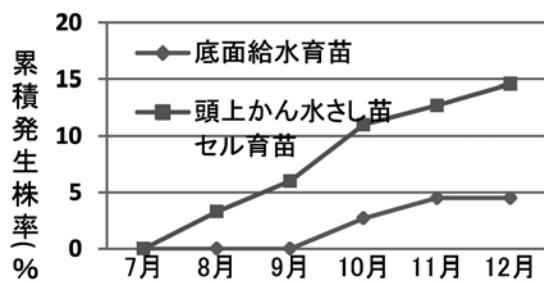


図1 炭そ病の発生株率「まりひめ」

- ①ランナ一切離、底面給水開始日:7月5日
- ②各 区:500株調査
- ③培土の種類:システムソイル102
- ④薬剤履歴:ジマンダイセン、ベルクート
アントラコール、セイビア

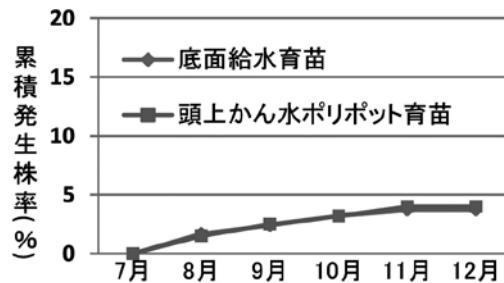


図2 炭そ病の発生株率「紅ほっぺ」

- ①ランナ一切離、底面給水開始日:7月10日
- ②各 区:500株調査
- ③培土の種類:トップランナー
- ④薬剤履歴:ベルクート、ジマンダイセン
デラン、アントラコール

4. 今後の取り組み

- (1) 管内のいちご高設育苗の導入率は35%で底面給水育苗に取り組みやすい環境にあり、主力品種「さちのか」についても、「まりひめ」と同様に炭そ病対策を考えていく。
- (2) 小型成型トレイ(水浸透性の強い不織布をトレイの上に載せ、チューブかん水によりポット底面から給水する方法で、余分な水は毛細管現象により外に排出される)を利用し、底面給水育苗は、10a当たり27万円程度の資材費がかかるので、生産者の資材軽減のため他作物で使用している資材の活用を提案していく。
- (3) 底面給水育苗の留意点や実証圃の結果を研修会等で報告し、栽培技術の平準化を図っていく。

【留意点】

- ①底面給水育苗は短時間でポット培土に給水できるので、根の伸長を確認し過湿に注意
- ②育苗開始期には、萎れの発生や肥料分解促進のための手かん水の励行
- ③高設棚の水平設置
- ④トレイ内排水の確認

普及活動レポート

REPORT

飛躍する柿産地の振興 ～あんぽ柿加工の取り組みについて～

伊都振興局 農業振興課

1. はじめに

日本一の柿産地である伊都地域では、近年、生果販売の不振が続き価格が低迷、農家の所得が減少している。当地域は生果生産中心の柿産地であるが、六次産業化の後押しもあり、干し柿やあんぽ柿加工への関心が高まっている。そこで、振興局では、①あんぽ柿の製造・販売へ参入する生産者・業者を支援するため、柿の加工技術と品質を高める研修会を実施し、②干し柿の用途拡大を目的に、県内のパン製造業者に働きかけ、商品開発を進めるなどしてきたので、本稿ではその取り組みを紹介する。

2. 加工研修会の開催

平成25年3月6日、伊都振興局で「第2回柿加工研修会」を開催、柿生産農家、市町村職員ら約60名が参加した。研修では、(社)県農産物加工研究所所長 稲葉伸也氏、県工業技術センター加工担当者、医農連携コーディネーター三谷隆彦氏等の講師が、県内外のあんぽ柿品質の調査結果や、他産地の事例報告について講演。あんぽ柿の製造等に関する基準が明確化されていないため、県内あんぽ柿の品質にバラツキがある、既にブランド化が進んでいる市田柿では、製品としての基準や衛生管理規定などが整備されているなど報告がなされ、当地域のあんぽ柿ブランド化に向けて、出席者は産地の課題を認識し、相互に活発な意見交換を行った。また、会場には、参加者が作ったあんぽ柿約30点を展示、出席者は他者の仕上がりやパッケージを自分の商品と熱心に比べていた。



研修会の様子



商品を比較する参加者

3. 和歌山あんぽ柿加工に関する検討会を設立

加工研修会を開催した結果、地域全体であんぽ柿のブランド化や品質向上には、関係機関が連携して課題に取り組む必要性が認識され、7月22日、和歌山北部農業共済組合伊都支所で、「和歌山あんぽ柿振興に関する検討会」を開催し、生産者やJA、県関係機関が集まり、検討会を設立した。検討会では、取り組む内容やあんぽ柿の現状や衛生

管理等について協議や意見交換が行われ、今後は、①品質のバラツキの解消、②製品原料としての一次加工に向けた取り組み、③「地域ブランド品」としてのイメージ構築などに向けて意見交換や意思統一を図りながら、今後の生産振興と地域産業に発展に繋げていく方向である。



和歌山あんぽ柿振興に関する検討会

[和歌山あんぽ柿振興に関する検討会の主な参加機関等]

紀北川上農業協同組合 紀の里農業協同組合代表理事組合

食品産業協議会会長（紀州食品株式会社）

合同会社かつらぎ町あんぽ柿加工組合

新岡農園 まるしげ農園

パンドラファーム紀州事業所

株式会社パーシモン（前林ヶ峰農産加工グループ長寿の郷）

県関係機関（商工観光労働部産業技術政策課、農林水産部食品流通課、

工業技術センター、那賀振興局及び伊都振興局）

4. 干し柿を使った商品の開発（柿パン）

干し柿を使った二次加工品を広めようと、和歌山市内のパン製造業ブーランジェピノキオ（以下「ピノキオ」）へ働きかけた。ピノキオは、原材料素材に県産農作物を使うことに興味を持っており、食味テストを経て、秋からの季節商品として柿パンが商品化された。パン1個につき、1／4個のあんぽ柿が含まれおり、あんぽ柿の甘味がパンと相性がよく、美味しく仕上がっている。



あんぽ柿を使った商品（柿パン）

5. 今後の取り組み

伊都振興局では、今後も、設立された検討会を核に関係機関の認識や連携を深めつつ、地域の生産者のあんぽ柿の品質向上やブランド力アップに向けた取り組みを支援していく。

普及活動レポート

REPORT

温州みかんの浮皮軽減技術の現地実証試験について

有田振興局 農業振興課

1. はじめに

温州みかんの中晩生品種は、成熟期の高温と多雨により果皮と果肉が分離する浮皮現象が認められ、年によっては多発となり生産、販売面で問題となっている。そこで、有田管内の農業関係機関の技術職員により構成される有田農業技術者会は、植物生長調節剤のジベレリン(GA)とプロヒドロジャスモン酸(PDJ)の向山温州への混用処理試験を平成23年度から2年にわたり実施したのでその結果を紹介する。

2. 取り組みの内容と成果

広川町内の向山温州園(15a、水田転換園)にて、透湿性マルチシート敷設(マルチ敷設)とGA(3.3ppm)+PDJ(25ppm)の混用処理を組み合わせた4試験区を設定し、12月上旬(収穫適期)及び12月下旬(過熟期)における浮皮発生程度と果実品質について調査した。

1) 平成23年度 (浮皮果実多発年)

8月以降の高温多雨の気象条件のため、いずれの調査時期及び処理区においても半数以上の果実に浮皮が認められ、裸地区では12月上旬で84%、12月下旬ではほぼすべての果実で浮皮が認められた(図1)。GA+PDJ混用処理区では、裸地条件下で浮皮果実発生程度を抑制する傾向が認められ、果実品質への影響はほぼ認められなかった。

2) 平成24年度 (浮皮果実少発年)

8月以降の気温低下が早く進み、降水量は前年度より50mm程度少なかつたため、いずれの調査時期や処理区においても23年度に比べて発生果が少なく、かつ浮皮程度の進行も軽度であった。GA+PDJ混用処理は、浮皮発生及び程度の進行を抑制する傾向が認められ(図1)、果実品質への影響については、12月上旬の調査時に一部の果実で青みが残る着色遅延が認められたが、マルチ敷設や12月下旬には裸地区との差は小さくなつた。

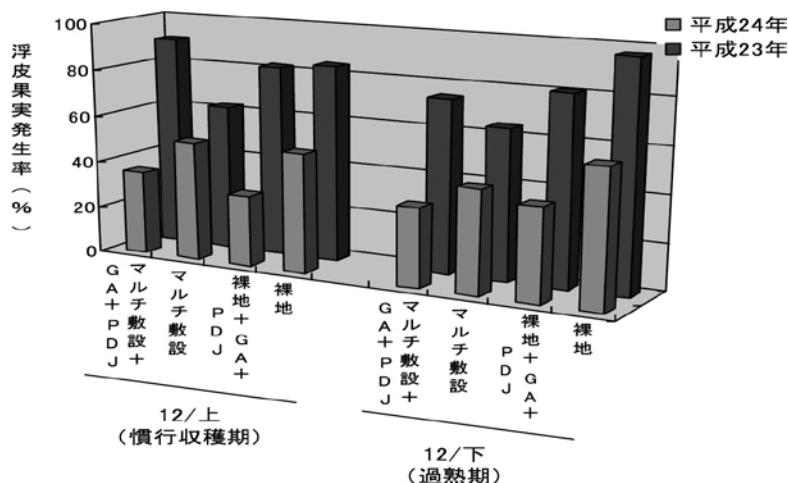


図1 浮皮果実発生率 (%)

3. 今後の取り組み

浮皮発生には年次変動が認められ、GA+PDJ混用処理の効果も変動したが、浮皮の発生や程度の進行を抑制する傾向が認められた。果実品質への影響は、一部の果実で青みが残る着色遅延が認められたが、マルチ敷設や収穫期を遅らせることで対応できることが示唆された。

今後、GA散布濃度や混用散布時期の検討を行い、浮皮発生の抑制と着色遅延の改善にどのように影響を及ぼすかについて、更に実施例を蓄積していくことが必要であると思われる。

4. 参考【ジベレリンとプロヒドロジャスモン酸による温州みかんの浮皮軽減技術】

ジベレリンの浮皮軽減効果は、古くから知られていたが、薬害の発生などで実用化に至っていなかった。しかし、プロヒドロジャスモン酸と混用することで、①浮皮軽減効果を保つつつ、ジベレリンの処理濃度を低下できること、②薬害の発生が回避できることが判明したため、貯蔵性の高い青島温州等を対象に研究が進み、現在、下記の農薬登録内容で実用化されている。

【登録内容】

ジベレリン水溶剤又は液剤の3.3～5ppmとプロヒドロジャスモン酸液剤の1,000～2,000倍を混用。収穫予定日の3ヶ月前（但し、収穫45日前までに）1回散布

※登録内容は平成25年10月1日現在であり、使用時には農薬容器等に記載されている使用基準を御確認下さい。

【県果樹試験場での向山温州に対する試験結果】

ジベレリン3.3ppmとプロヒドロジャスモン酸の混用散布を9月上旬に行うことでの着色遅延が見られる場合があるものの、向山温州の浮皮を軽減できることが示されている。

表1 GA・PDJ混用処理による‘向山温州’の収穫時の浮皮度(2010年)

時期	処理区		S	M	L	2L≤	全果実
	GA濃度	PDJ濃度					
	対照区		0.41	0.87 a	1.59 a	2.29 a	1.15 a
8月中旬	1ppm	25ppm	0.54	0.73 ab	1.36 ab	2.00 ab	0.95 ab
8月中旬	3.3ppm	25ppm	0.18	0.51 ab	1.06 b	1.77 b	0.77 b
9月上旬	1ppm	25ppm	0.38	0.59 ab	1.20 ab	1.58 b	0.88 ab
9月上旬	3.3ppm	25ppm	0.16	0.46 b	0.91 b	1.56 b	0.68 b
	有意性		n.s.	*	*	*	*

※処理日：2010年8月13日および9月1日 収穫日：2010年12月5日

※浮皮度：収穫した全果実を階級ごとに分類した後、触感により浮皮の程度を無(0)、軽(1)、中(2)、甚(3)に数値化し、その平均値を求めた。

※有意性：Tukeyの多重検定により異なる文字間に5%レベルで有意差あり。

表2 GA・PDJ混用処理による‘向山温州’の収穫時の浮皮度(2011年)

時期	処理区		M	L	2L	3L	全果実
	GA濃度	PDJ濃度					
	対照区		0.30	0.69 a	1.18 a	2.12 a	1.40 a
8月中旬	3.3ppm	25ppm	0.39	0.65 a	1.00 ab	1.84 ab	1.29 a
9月上旬	1ppm	25ppm	0.22	0.48 a	0.86 bc	1.55 bc	0.95 a
9月上旬	3.3ppm	25ppm	0.31	0.37 b	0.76 c	1.29 c	0.85 b
	有意性		n.s.	*	*	*	*

※処理日：2011年8月15日および9月6日 収穫日：2012年12月5日

※浮皮度：収穫した全果実を階級ごとに分類した後、触感により浮皮の程度を無(0)、軽(1)、中(2)、甚(3)に数値化し、その平均値を求めた。

※有意性：Tukeyの多重検定により異なる文字間に5%レベルで有意差あり。

普及活動レポート

REPORT

梅の安定生産と優良品種導入による産地の活性化

日高振興局 農業振興課

1. はじめに

日高地域は、本県梅栽培面積の46%を占める主産地であるが、「南高」は年により結実が不安定である上、改植後の樹勢低下やコスカシバ被害の増加、生育不良樹の発生などの問題があり、安定生産が課題となっている。また梅干需要の底上げとともに梅干以外の新たな用途を望める品種の導入も求められている。そのため、日高振興局では、「梅の安定生産と優良品種導入による産地の活性化」を最重点課題の一つと捉え、普及活動に取り組んでおり、ここではその活動について紹介する。

2. 取組の内容と成果

(1) 安定生産対策

新梢の摘心処理技術や炭資材によるいや地対策、コスカシバ被害対策等について、講習会の開催や啓発チラシ等により、「ウメ栽培管理マニュアル」に基づく栽培技術の普及・推進に取り組んでいる。



【安定着果対策】

若木の収量増加とせん定作業の省力化を目的とした新梢の摘心処理技術の導入推進のため、みなべ町西本庄の実証園で、町・JAみなべいなみ・うめ研究所と共に、平成24年度から講習会を開催している。骨格枝の上面から発生する新梢を4月下旬、5月下旬の2度摘心することで、結果枝の確保、収量の増加、徒長枝発生本数が少ない、冬期せん定量も減少するなどの効果を説明した。また、結実向上のため、「NK14」や「みなべ21」など優良授粉品種の高接ぎ導入による混植率の向上も併せて推進している。平成24年12月11日には、せん定講習会を開催し、収量調査結果を報告、また、実際に摘心処理樹をせん定することで、その効果を実感してもらった。

【樹勢維持対策】

梅園の2代畠では改植後の生育が劣る「いや地」症状を示す場合がある。いや地症状軽減を目的とした炭資材施用技術の導入推進のため、日高・西牟婁地域の生産者団体、市町、JA、振興局で組織する紀州うめ研究協議会において現地実証試験を行っている。

南部郷梅対策協議会生育不良特別対策部会の調査では、平成24年度の生育不良発生本数は6,232本と漸減傾向にあり、平成12年のピーク時と比べて10分の1程度となっているが、コスカシバ被害樹が7,647本と近年増加しており、性フェロモン剤の設置推進等の啓発チラシを作成し、JA広報誌への折込等により、その対策の生産者へ周知を図っている。

毎年10～11月には、JA、みなべ町とともに、せん定・土づくり講習会を実施し、「ウメ栽培管理マニュアル」に基づく栽培技術の普及に取り組んでいる。

(2) 新品種導入対策

梅干以外の加工用途が望める品種として、果皮・果肉ともに紅色色素が多い特徴をもつ「露茜」をとりあげ、安定生産技術の確立と産地化支援に取り組んでいる。

①展示ほの設置

「露茜」の早期成園化のため、高接ぎ更新による栽培実証園をみなべ町清川に設置するとともに、みなべ町気佐藤の苗木定植園を展示ほとして設置し、その収量性や生育特性等を調査している。

「露茜」は、熟期が「南高」より遅く、樹上で完熟期まで生育させると鳥等の被害を受けやすいため、完熟前に収穫した果実を追熟処理により着色させる技術の現地普及について検討している。

平成24年度には、うめ研究所実験室内においてエチレン発生剤処理による追熟処理を行ったところ、ほぼすべての果実の着色が進行し、果肉内部も着色した。追熟処理による果実重量の減少は3～4%程度であった。



また、現地に適した追熟処理方法を検討するため、エチレン発生剤とともに「南高」の完熟果(落ち梅)による追熟処理について、「露茜」果実とエチレン発生剤の割合または「南高」落ち梅の割合を変えて試験したところ、いずれの試験区でも追熟良好であった。平成25年度には、さらに規模を大きくし、パレット単位での追熟処理試験も実施している。

②栽培研修会の開催と加工品づくり支援

平成24年10月25日、展示ほの調査結果等を活用して、産地化に取り組んでいる清川出荷会の生産者ら約100名に対して、うめ研究所と連携し、栽培研修会を開催した。

また、「清川梅を食べる会」によるジャム・シロップなどの加工品作りや地元菓子店と連携したケーキ作り、さらに県内外の酒造メーカーとの連携による新商品づくりも、うめ研究所と共に支援している。

3. 今後の取組

摘心講習会、せん定・土づくり講習会等を通じて、優良授粉品種の導入や性フェロモン剤の設置を促進し、改植時のいや地症状やコスカシバ被害による樹勢低下の防止することで、「南高」の安定収量を確保するとともに、「露茜」の栽培面積拡大と加工業者との協働による新需要開拓を一体的に推進し、産地の活性化を進めていく。

普及活動レポート

REPORT

梅を核とした産地育成と果樹複合経営の確立

西牟婁振興局 農業振興課

1. はじめに

近年、梅栽培において気象変動等による生産量の年次間差が大きいにうえに、梅干し価格も低迷している。一方、カンキツでは、JA紀南の宮本早生集荷が本年度で終了する。そのため、梅では高品質生産安定対策と加工特性のある新品種の探索、カンキツでは宮本早生に変わる新品種の導入と高品質生産対策が課題となっている。その解決に向けて、西牟婁振興局では、梅を核とした果樹の複合経営の確立を普及の最重点課題と捉え、普及活動に取り組んでいる。ここでは、その活動を紹介する。

2. 取り組みの内容と成果【梅対策】

【高品質安定生産対策】

(1) 「南高」摘心栽培の推進(摘心栽培のメリット:初期収量アップ)

「紅南高」の生産量を増やすため、摘心栽培の実証展示ほを設置し、生産者及び関係者を対象とした摘心研修を実施した(参加者約30名)。

(2) 「NK14」の高接ぎ園で果実調査

「南高」に比べ、着果が良好で、熟期はやや早い(4~5日)が、果実が小さく(20~25g)、果皮色は淡いことがわかつた。

(3) 「NK14」実証展示ほの設置

高接ぎ園での結果を踏まえ、「南高」の着果不良園に設置した。H25.5.20に着果率の調査を行った結果、5年生で16%と良好であった。

【新品種導入と加工特性の把握】

(1) 新品種の試験栽培

平成24年に「燈高」「露茜」「翠香」の苗を農家7戸で定植、試験栽培を開始。

(2) 新品種の加工特性

梅研究所が試作した「露茜」「翠香」「完熟南高」のジュースを、JAや田辺市等関係機関で結成したプロジェクトチームで試飲検討した結果、「露茜」は綺麗な紅色に着色するが酸味少ない、「翠香」は「洋ナシ」の香りがある、「完熟南高」は「モモのネクター」に似た味わいになることが分かった。

3. 今後の取り組み【梅対策】

【高品質安定生産対策】

(1) 安定生産を目的とした摘心栽培技術の普及

・摘心栽培技術の普及を図るため、次年度も研修を実施していく。

(2) 「NK14」実証展示ほ果実調査

- ・今後も継続して調査を行い、生産者にフィードバックしていく。

(3) 「NK14」せん定方法検討

- ・果実肥大等を目的としたせん定技術の確立が必要であり、関係機関とその方法について検討する。

【新品種導入と加工特性の把握】

- ・新品種の果実特性を評価・検討し、それに応じた加工品開発につなげていく。

2. これまでの活動と成果【カンキツ対策】

(1) 極早生品種YN26の導入

①特性調査(高接ぎ園)

「ゆら早生」に比べて減酸が早く、H24.9.20時点では1.0となつた(図1)。平成23年の同時点でも1.1であり、产地としては、「日南の姫」が極早生ミカンのスタートをきり、「YN26」はその後に続く品種との位置づけになることがわかつた。

②実証展示ほの設置

平成25年3月、関係機関及び農家と共に上富田町岡の傾斜地園に2年生苗木30本を定植した(写真1)。現時点では順調に生育している。

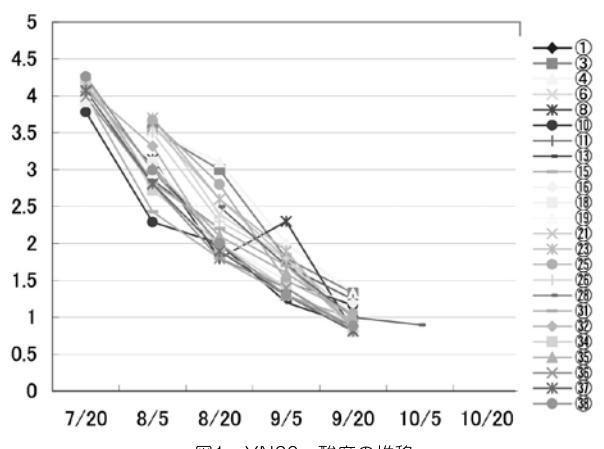


写真1 YN26の定植作業

(2) グリーンマルチ敷設による温州ミカン生育促進

春期の発芽・開花時期を前進し、収穫期の遅れを解消するため、有効性を検証したが、開花時期や品質には顕著な差は見られず実用性は低いと判断した。

3. 今後の取り組み【カンキツ対策】

○YN26実証園を活用した栽培技術の普及

- ・高接ぎ園での品質調査を継続して実施し、年による品質のバラツキを検証する。
- ・実証園での栽培経過をマニュアル化し、技術の普及を目指す。
- ・JAみかん部会を対象に現地研修会を開催する。
- ・26年にも11本追加定植予定。

○葉面散布剤による着色促進効果実証

- ・極早生早期出荷技術開発への期待が強く、秋季マルチ敷設・葉面散布剤による着色促進技術の実用性を検証し、紀南ブランド力の向上につなげていく。

普及活動レポート

REPORT

「サツマイモ(なんたん蜜姫)」栽培への取組について

東牟婁振興局 農業振興課

1. 取組の背景

全国的な傾向同様に東牟婁地域でも農業従事者の減少や高齢化の進行などを背景として、耕作放棄地は増加傾向である。東牟婁地域の耕作放棄地面積は437ha、県全体4,228haの10%を占めている。中でも串本町では東牟婁管内の41%を占める168.7haと最も多くなっている。

東牟婁地域ではサツマイモが畠地帯を中心に多く栽培されている。サツマイモは干ばつや台風等の気象災害にも強く、土壌も比較的選ばないなど栽培しやすい作物で、そのほとんどは自給用、贈答用に消費されている。

2. 取組の経過

以上のことから、遊休農地・耕作放棄地の解消に向けた振興作物としてサツマイモを導入。串本町を重点地域として、サツマイモの生産から加工、販売までの一貫した取り組みによってブランド化を図り、地域農業・地域経済の活性化を目指そうと、作付面積の拡大や加工品の開発、販売促進など、サツマイモ産地の育成に取り組んだ。

平成21年には「串本さつまいも会」を設立。串本町でのみ栽培されている品種「なんたん蜜姫」について同会と農業試験場が連携して系統選抜を行っている。当初、会員から集めたものは20系統あり、その中から収量・品質の良好なもの2系統を選抜した。

また、新規栽培者の確保に向け、一般町民から栽培希望者を募集し、栽培指導等の支援を行ってきた。

さらに、加工品への取組として『なんたん蜜姫』を使った「焼き芋アイス」や「干し芋」の商品化への取組支援やPR活動として各種イベント会場や直売所で消費者や実需者に焼き芋販売等によりアピールを行ってきた。

現在、出荷者26名、栽培面積は54aと小規模ながら活動を行っている。



「なんたん蜜姫」栽培研修



系統選抜試験ほ場の様子

3. 「サツマイモ」のこれから

「串本さつまいも会」会員を中心に系統選抜により選抜した優良系統を普及していく。
耕作放棄地を借り上げて貸農園・体験農園として整備し、参加者を募集。栽培講習会等(植え付け・収穫・貯蔵・加工・育苗)を実施することで新規栽培者を育成する。

その他、イベント会場や直売所での販売により引き続き「なんたん蜜姫」のPRを行い、ブランド化を進めてゆく。

4. 参考【なんたん蜜姫とは】

古くからサツマイモ栽培が盛んな串本地域で、イモの肉色が黄色で焼き芋にしたとき肉質に粘りがあり、甘みが強いものが一部の生産者の間で作り継がれていた。ツルの先端付近では赤紫色に発色するのが特徴で「さいばん」イモと呼ばれていたが、選抜を行いJA紀南から販売されるものが「なんたん蜜姫」と呼ばれている。



青果の荷姿 (3kg入り)

※『なんたん蜜姫』はWebサイトから購入可能。「JA紀南オンラインショップ」で11月頃から販売予定



ツル先の発色が特徴



焼き芋にした「なんたん蜜姫」

【「なんたん蜜姫」の加工品】



さつまいもアイス



干しいもの真空パック

県農業士会活動レポート

REPORT

平成25年度県農業士会連絡協議会県外視察報告 ～JAみつかび(静岡県)、有限会社ゴトーアグリ(愛知県)を視察～

和歌山県農業士会連絡協議会事務局

8月28～29日、県農業士会連絡協議会では、静岡県浜松市のJAみつかび、愛知県丹羽郡扶桑町の有限会社ゴトーアグリへの視察を実施し、会員、県職員ら31名が参加した。本稿ではその様子をレポートする。

今回の視察は、産地のブランディング戦略に取り組む先進JAの事例、耕作放棄地対策に取り組む農業生産法人の事例を学ぶことを目的としたもの。

研修初日は、JAみつかび本館で、営農部柑橘課の森田能正課長が『みつかびブランドを支えるもの』について講演し、約90億の販売高を誇るJAみつかびのみかん産地を支える原動力について、①生産者自ら販売責の全てを決定し、責任を負う出荷組織、②市場への供給責任を果たすための厳しい出荷ルール、③将来予測に基づく販売戦略と整備された大規模選果場にあると説明した。さらに六次産業化への取り組みとして、CAS (Cells Alive System) 冷蔵したみかん(青島温州)を『氷蜜柑』として販売していることを紹介。試食品が提供され、参加者らは、不思議な食感の半解凍状態の果実を味わっていた。

その後、場所を園地に移し、JAみつかびの特徴である園内道や灌水チューブなど整備の行き届いた作業性の良いほ場を見学した。

2日目は、JA愛知北大口支店で、有限会社後ゴトーアグリ代表取締役の後藤康明氏が「法人経営と耕作放棄地の対策」について講演。後藤氏は、耕作放棄の増加や担い手の減少をチャンスと捉えているとし、町内の耕作放棄地は全て引き受け、規模拡大、現在はダイコン、ニンジン、タマネギの露地野菜で年間延べ25.2haの作付けを行っていると説明した。

また、経営方針として、①利益計算できるよう全量契約販売、②必要最小限の機械設備のフル活用、③土にこだわり、旬のものを適地適作しているとし、最後に家族経営から脱しつつある中、人を雇用する経営者としての立場から雇用される者への責任を痛感しており、常にリスクを見極めながら新しい取り組みを継続していく必要があると締めくくった。

参加者らは、特にJAみつかびの取り組みを自身の果樹産地に重ねて考え、生産者組織の強さや厳格な販売ルールと戦略、雑草が見あたらないほど、管理の行き届いた園地に刺激を受けていた。

今後、この視察の成果を地域農業のリーダーである農業士として、産地振興の取り組みに還元していくことが期待される。



JAみつかびでの研修



JAみつかびの園地を視察



園内道が整備された園地



防風・防鳥ネットを整備した園地 (灌水チューブが整備され、雑草もない)



CAS冷蔵による冷凍みかん『冰蜜柑』1個300円で販売。手で割って食べることが出来る。



有)ゴトーアグリ 後藤康明代表取締役



ゴトーアグリの倉庫にて研修

(参考)農業士とは

地域農業の振興と農村の活性化にリーダー的役割を果たしている農業者に対し、「指導農業士(65歳まで)」「地域農業士(60歳まで)」「青年農業士(40歳まで)」の称号を付与。
昭和51年から県知事が認定している制度。

平成25年10月現在の認定者数は以下の通り。

指導農業士	187名	(うち女性 28名)
地域農業士	590名	(うち女性 72名)
青年農業士	172名	(うち女性 1名)
合 計	949名 (うち女性 101名)	



表紙

和歌山市 指導農業士
吉本 好澄さん

(現在、和歌山県農業士会連絡協議会会長)

吉本さんは先代からぶどうづくりを受け継ぎ、その卓越した技術で、約1ha、10万房ものぶどうを家族で作られています。

お客様の反応を感じ、喜ぶ顔を見たいとの想いから、全て直接販売。
完熟したぶどうを厳選し、収穫されています。

和歌山の農業士 第1号

発行日：平成25年11月

編 集：和歌山県

農業士会連絡協議会

印 刷：(有)土井印刷



和歌山の 農業士

和歌山県農業士会連絡協議会